

『城井谷の蓬花』付録 もくじ

資料 1	城井宇都宮家の出自	2
資料 2	下野宇都宮家・城井宇都宮家当主	3
資料 3	宇都宮家嫡流・庶流の各家名の語釈	5
資料 4	城井谷の諸城名の語釈	6
資料 5	守護	6
資料 6	鎌倉時代の豊前国交通路	8
資料 7	城井宇都宮家の年譜	9

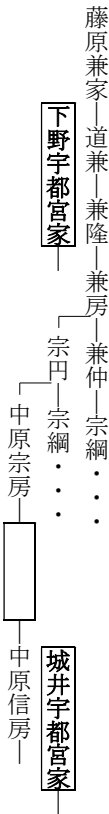
注：『城井谷の蓬花』付録は予告なく訂正、変更する場合があります。ご了承ください。ご了承ください。

参考文献・資料は『城井谷の蓬花』の冊子をご参照ください。

原紙四六判をA5判PDFとしています。

# 資料1 城井宇都宮家の出自

## 【下野宇都宮家・城井宇都宮家の系譜】



・平安時代の後期、藤原氏一族の藤原北家の藤原道兼の曾孫と称する藤原宗円が奥州征伐（前九年の役）一〇五一―一〇六二）で派遣された源頼義・義家の父子に帯同し、下野国明神山二荒山神社で討伐軍の兇徒調伏を祈禱をし、その功により二荒山神社の別当職に任じられ、宇都宮氏の開祖となった。

・藤原宗円の次子、中原宗房は、鳥羽天皇（在位一一〇七―一一二三）の中宮で後の待賢門院となられた、藤原璋子に仕え、造酒正・待賢門院序主典代として活躍した。

宗房の孫（注）、中原（宇都宮）信房は下野国を本貫地とし、くらひにんしんぎのしやう蔵人所衆として京都朝廷に勤仕した後、源頼朝の幕府草創期の野木宮の戦いに勝利し頼朝の関東平定を実現に貢献した。以降は頼朝の爪牙の臣として源平合戦で敗れた平氏殘党の追討で鎮西に派遣された。

注・嫡子との説もあるが、宗房の生誕年と信房の生誕年の相関から本書では孫とした。

・文治三年（一一八七）天野遠景と鬼界島の平家殘党追討で功をあげ、鎮西平定に貢献し、恩賞として日向国に所領、豊前国の平家与党坂井種遠の没官領が下給され豊前国衛在庁職・伝法寺庄地頭職などを得て、豊前国に一部し、仲津郡城井浦に神楽城を築城して本拠とし城井宇都宮家の開祖となった。

・信房は治世にも通じ豊前国内の宇佐、筑城、下毛、仲津、田川などの各郡に兄弟たちを配し、野仲・山田・成恒・西郷・大和・友枝・佐田などの庶家を輩出し、北条得宗家と結びつくことで筑後・豊前の守護に任命され、城井宇都宮一族は豊前最大の武士団となった。また神仏信仰にも篤く、彦山及び彦山六峰の修験

道の宗徒との融和を図り、社寺の建立、勸請、復興に尽くし領内の安定を図った。

・二代当主景綱から宇都宮を名乗り、五代当主頼房は本拠を本庄（築上町）に移す。六代当主冬綱から城井を名乗る。

・戦国時代になると十八代当主鎮房は、中国大内氏、豊後大友氏と薩摩島津氏の勢力争いの中で、都度敵味方の趨勢を見極めながらも最後には勢力を失い、豊臣秀吉の九州征伐には嫡男朝房が参陣するも、その後の九州国分では豊前六郡は黒田孝高の領地となり、天正十五年（一五八七）秀吉は鎮房に伊予への転封を命じた。鎮房は伝来の土地と家宝を守るためこれを拒否した。小倉城主毛利勝信の勧めで一時的に城井谷城を出て秀吉に領土の安堵を嘆願したが秀吉は本領安堵をせず、肥後国人一揆に続いて豊前でも鎮房方の国人一揆が起こり、鎮房はこれを好機として挙兵し城井谷城を奪還。黒田との攻防は三カ月には及んだが、最後は鎮房の娘鶴姫を黒田長政に輿入れすることで和議が成立。

しかし、天正十六年（一五八八）四月二十日、鎮房は中津城で謀殺され、嫡男朝房は黒田孝高の肥後国人一揆征圧の先で殺害され城井宇都宮三百九十六年の歴史は幕を閉じた。

## 資料2 下野宇都宮家当主・城井宇都宮家当主

『東西宇都宮太平記（下）』（著 原田種純氏）による。

- ・下野宇都宮家二十二代当主国綱は、豊臣秀吉により改易、宇喜多秀頼の預かりとなる。
- ・下野宇都宮家二十三代当主義綱は、水戸藩家臣となり宇都宮家滅亡。

【下野宇都宮家当主】\*別説 †城井宇都宮家へ養子

	当主名	生年	没年
初代	藤原宗円	(*一〇三三—一一一一)	*一〇四三
二代	八田宗綱	(二〇八六—*一一五九)	*一一六二
三代	宇都宮朝綱	(一一二二—一二〇四)	
四代	宇都宮成綱	(一一五六—一九二)	別名業綱
五代	宇都宮頼綱	(一一七二—一二五九)	
六代	宇都宮泰綱	(一二〇二—一二六〇)	
七代	宇都宮景綱	(一二三五—一二九八)	
八代	宇都宮貞綱	(一二六六—一三二六)	†子冬綱
九代	宇都宮公綱	(一三〇二—一三五六)	†子家綱
十代	宇都宮氏綱	(一三二六—一三七〇)	
十一代	宇都宮基綱	(一三五〇—一三八〇)	
十二代	宇都宮満綱	(一三七六—一四〇七)	
十三代	宇都宮持綱	(一三九六—一四二三)	
十四代	宇都宮家綱(等綱の追放期間に当主か)	(四二〇—一四六〇)	
十五代	宇都宮明綱	(一四四三—一四六三)	
十六代	宇都宮正綱	(一四四七—一四七七)	
十七代	宇都宮成綱	(一四六八—一五一六)	
十八代	宇都宮忠綱	(一四九七—一五二七)	
十九代	宇都宮興綱	(一四七六—一五三六)	

【城井宇都宮家当主】

	当主名	生年	没年	空白は直系
初代	中原信房	(一一五六—一二三四)		
二代	宇都宮景房	(不詳)	(一一二八)	
三代	宇都宮信景	(不詳)	(一二四八)	
四代	宇都宮道房	(一二二二—一二七五)		別名通房
五代	宇都宮頼房	(不詳)	(一三三九)	
六代	†城井冬綱	(一二八八—一三六六)		
七代	†城井家綱	(不詳)	(一三六八)	冬綱の甥
八代	城井直綱	(一三二五—一三八一)		冬綱の孫
九代	城井盛綱	(一三四三—一三九六)		
十代	城井家尚	(一三六〇—一四二九)		
十一代	城井尚直	(一三六八—一四〇八)		盛綱の子
十二代	城井俊房	(不詳)	(不詳)	家尚の子
十三代	城井盛直	(一三八五—一四六八)		家尚の子
十四代	城井秀房	(一四二二—一五〇九)		
十五代	城井興房	(一四六一—一五四二)		
十六代	城井正房	(一四七八—一五六二)		
十七代	城井長房	(一五〇六—一五八八)		

二十代 宇都宮尚綱 (二五一三—一五四九)  
 二十一代 宇都宮広綱 (二五四五—一五七六)  
 二十二代 宇都宮国綱 (二五六八—一六〇八) 改易  
 二十三代 宇都宮義綱 (二五九八—一六六四) 滅亡

十八代 城井鎮房 (二五三六—一五八八) 滅亡  
 (十九代) 城井朝房 (二五七一—一五八八)  
 (二十代) 城井朝末 (二五八八—不詳)

【城井宇都宮家一族】\*32

長男 次男 三男 四男 五男 六男 七男 八男 九男  
 初代当主 中原信房 中原宗隆 野仲重房 山田政房 深水興房 西郷業政 廣澤直房 那須有家 江里口業俊  
 二代当主 宇都宮景房 笠間有房 如法寺信政 仲峰谷家信 麻生国弘 加来正房 鹿島泰房 山田景長  
 三代当主 信景 北条家正 塩谷家房 長沼行房  
 四代当主 通房 深江盛吉 横川為平 友枝信範 荒尾範景 赤熊範資 三宅高衡  
 五代当主 頼房 七井盛房 経房 上条道氏 実兼  
 六代当主 冬綱 伝法寺景忠 楊梅仲房 佐田公景 豊房 (頼房の長男、伊予宇都宮家の祖)  
 七代当主 \*城井重綱 (以下略)  
 注：中原信房の兄弟の内、重房、政房、興房、業政は信房と共に豊前国入り。

資料3 宇都宮家嫡流・庶流の各家名の語釈

本書『城井谷の蓬花』内では下野宇都宮家を嫡流とし諸国の庶流は令制国名を冠した。

・下野宇都宮家 ……下野国の藤原宗円を祖とする以降の代々の宇都宮家の総称。

・城井宇都宮家 ……宇都宮信房を祖とする以降の代々の総称。最初の本拠地「城井(浦)」を冠した。

・豊前宇都宮家 ……通称とする場合もあるが、本書『城井谷の蓬花』ではとらない。

・城井家 ……口伝で使用する場合もある。

#### 資料4 城井谷の諸城名の語釈

本書『城井谷の蓬花』では福岡県築上町教育委員会の呼称に沿いました。

・城井ノ上城さいのこじょう …戦国時代の城井宇都宮家の本城。所在は築上町寒田さむだ。別称は萱切城・茅切城。

犬ヶ岳を源流とする城井川沿いにある山城で東西に自然石の裏門・表門を配置し、川の下流に「三丁弓ノ岩」が登城路を遮るようにそびえ立っている。

・城井谷城さいだにじょう・城井郷城

・城井城 …城井ノ上城の別称との事例もあるが、本書では城井谷又は城井郷に所在した諸城の総称。  
…城井宇都宮家の菩提寺天徳寺の裏山の本庄城の別称（若山城とも）。

#### 資料5 守護

【源頼朝が任命した守護】山陽道、南海道、畿内の諸国守護は略す

注…頼朝の初守護任命は、山陽道播磨国守護梶原景時（在位元暦元年（一一八四）二月～）。

京都守護 北条時政（文治元年（一一八五）十一月～文治二年（一一八六）三月）

一条能保（文治二年（一一八六）三月～建久三年（一一九七）十月）

西街道

鎮西惣追捕使天野遠景（一一八五～）

対馬国守護 河内義長（一一八五～）

肥前国守護 武藤資頼（一一九五～）

薩摩国守護 島津忠久（一一九七～）

・筑前国守護 武藤資頼（一一九五～）

・日向国守護 島津忠久（一一九七～）

・大隅国守護 島津忠久（一一九七～）

源頼朝 建久十年(一一九九)一月に歿す

豊前国守護 武藤資頼 (一一〇〇) 筑後国守護 大友能直 (一一〇六)

豊後国守護 大友能直 (一一〇六) 肥後国守護 北条時章 (一一五三)

老岐国守護 千葉胤継 (一一四四)

【鎌倉幕府 豊前国守護】\*32

武藤(少武) 資頼 (一一二〇—一二二五) 少武資能 (一二三〇—不明)

北条実政 (一二七九—不明) 北条政顕 (一二三〇—不明)

糸田(北条) 顕義 (一二一七—不明) 糸田(北条) 貞義 (一二三三—一二三三)

【室町幕府 豊前国守護】

少武貞経(不明) 一三三四 少武氏五代当主 少武頼尚(一三三四—一三五二) 少武氏六代当主

大友氏泰(一三五二—一三五二) 大友氏七代当主 大友氏時(一三五二—一三五四) 大友氏八代当主

宇都宮冬綱(一三五四—不明) 城井宇都宮家六代当主 少武頼澄(一三六一—一三六五) 少武氏九代当主

不明 (一三六六—一三七四) 今川貞世(一三七五—一三八〇) 九州探題

大内義弘(一三八〇—一三九九) 大内氏十代当主 不明 (一四〇〇—一四〇七)

大内盛見(一四〇八—一四三二) 大内氏十一代当主 大内持世(不明—一四四二) 大内氏十二代当主

大内教弘(一四四一—一四六五) 大内氏十三代当主 大内政弘(一四六五—一四九五) 大内氏十四代当主

不明 (一四九六—一四九八) 大友親治(一四九八—一五〇二) 大友氏十八代当主

大友義親(一五〇一—不明) 大友氏十九代当主 大内義興(一五〇九—一五二八) 大内氏十五代当主

大内義隆(一五二八—一五五二) 大内氏十六代当主

資料6 鎌倉時代の豊前国交通路

- ・大宰府官道…大宰府―米ノ山峠・関ノ山峠―香春―石鍋越・七曲峠―豊前国府
- ・田河道 …大宰府―米ノ山峠・関ノ山峠―香春―金辺峠きべ―小倉
- ・香春道 …豊前国府―七曲峠・石鍋峠―香春―金辺峠―小倉
- ・豊前道 …小倉―苅田―大橋―椎田―八屋―中津―宇佐



資料7 城井宇都宮家の年譜

◇年代譜の見方◇

〔律令国家の胎動〕……………時代の趨勢の括り

飛鳥時代(五九二―七一〇)……………時代区分(西暦)

建保六年(一一二八)……………年号(西暦)。南北朝時代は南北朝運用年号を併記

五月 宇都宮信房 豊前国守護職に補任\*□…事績月(日) 人名・家名・機関 事績内容等 出典

注…城井宇都宮家の人名及び特記事績は太字表記。

…家名氏名呼称で城井宇都宮家以外は「家・氏」を省略。城井宇都宮家当主交代不詳は先代没年時。

…現九州の呼称は、『吾妻鏡』編纂の正安二年(一一三〇)頃を境に鎮西から九州に呼称表記し、

幕府機関名はこれに依らない。元暦二年(一一八五)二月源範頼の事績で九州の表記有り。

〔律令国家日本の胎動・大宰府の変遷・北部九州の荘園体制〕

古墳(大和)時代(三世紀中頃―七世紀頃)

宣化元年(五三六) 大宰府の前身となる官家みやけが博多湾那津なのつに造営されていた(『日本書紀』)。

飛鳥時代(五九二―七一〇)

推古十六年(六〇八) 遣唐使小野妹子が随の使者を伴い那津に帰港。官家が外交接待の場所か。

推古十七年(六〇九) 大宰府「大宰(太宰)」が初めて記された。大和政権の出先機関か。

天智二年(六六三) 倭国は三年前滅亡した百濟再興支援で白村江(錦江河口)の戦いで唐・新羅軍に大敗。

天智三年(六六四) 外敵からの大宰府の護り。唐・新羅の侵略防衛の為、那津の官家を筑紫大宰府に移し、

水城、小水城を造営し、対馬金田城・九州北部・瀬戸内に防衛の山城を築城した。

天智四年（六六五）

大宰府の北に大野城、南に基肆城、兵站拠点として肥後国に鞠智城（熊本県山鹿市）、長門国に長門城、讃吉国に屋嶋城、大和国に高安城（奈良県生駒郡）を築城した。

天智十年（六七二）

日本書紀に「筑紫大宰府」が記述され登場する。

大宝元年（七〇一）

持統天皇は大宝律令を制定し律令国家体制に、国号を倭国から「日本」に改号した。

大宰府

大宝律令により地方出先機関を大宰府に設置し九州の内政統治と日本の外交を担った。

九州荘園

律令制により荘園体制が定着。豊前宇佐神宮・弥勒寺領下に九州最大規模の荘園を有し、安楽寺（大宰府天満宮）は筑前・筑後に九州第二の規模の荘園有した。

彦山

宇佐神宮・弥勒寺の流れを汲み靈仙寺の寺領七里四方を有していた。

奈良時代（七一〇―七九四）

和銅五年（七一二）

現呼称九州を「筑紫島」と記載（古事記）。

養老四年（七二〇）

現呼称九州を「筑紫洲」と記載（日本書紀）。

天平十五年（七四三）

大宰府を鎮西府に改称。筑紫国司が行政、鎮西府が軍事を司る。

天平十五年（七四五）

大宰府が再興された。

〈撰関政治から親政、院政へ・武士団の形成・下野宇都宮家の礎〉

平安時代（七九四―一一八五）

大同元年（八〇六）

大宰府、大宰大貳の官位相当が正五位上から従四位下に引き上げられた。

弘仁元年（八一〇）

大宰府、大宰権帥が初めて設置された。

延喜元年（九〇一）

大宰府、右大臣菅原道真が大宰権帥に格下げ、藤原時平の政略で大宰府に左遷された。

天慶四年（九四一）

大宰府、藤原純友の乱で大宰府（大宰権帥・橘公頼）が放火され陥落。

寛徳二年（一〇四五）

治暦四年（一〇六八）

朝廷

後冷泉天皇の在位中、権門の藤原頼通が寡占する荘園の増加で国家財政の危機。

永承六年（一〇五二）

康平五年（一〇六二）

奥州十二年合戦

奥州豪族安倍氏（安倍貞任・宗任）が朝廷に謀反。朝廷は討伐軍源頼義、義家父子

前九年の役

を派遣。関白藤原道兼の孫兼房の次男で石山寺（滋賀県大津市）座主藤原宗円が随

行し氏家郷勝山（栃木県氏家町）で朝廷軍の賊徒誅伐の祈願を行った。

康平五年（一〇六二）奥州安倍氏滅亡し朝廷軍が奥州を平定。

下野宇都宮

座主藤原宗円は下野守に補任され、宇都宮の別当と下野守を兼ね宇都宮氏を名乗る。

下野宇都宮家の祖となり養子宗綱が第二代当主となる。

康平六年（一〇六三）前九年の役に与力した藤原宗円が下野国守護職及び一宮別当職、宇都宮座主となる。

治暦四年（一〇六八）・延久四年（一〇七三）後三条天皇の在位中、自らが政務を行う親政を執る。

朝廷

諸国に荘園を有し免税措置で富裕な摂関家藤原氏主導の摂関政治から決別し、朝廷

の財政基盤の立直しの為、反摂関家の人材を登用し公正なる荘園整理令を発令した。

延久四年（一〇七三）

・応徳三年（一〇八六）白河天皇在位（上記）後、幼帝（堀河天皇）に譲位し上皇

朝廷

となり自ら執権を握り反摂関の院政を執る。幼帝の皇位は以降百五十年以上続き、

白河院政は四十三年、続いて鳥羽院政が二十七年続いた。

### 〈院政下の武士団・河内源氏の盛衰・平氏武家政権の誕生〉

元永二年（一一一九）平正盛（清盛の祖父）が肥前国藤津荘の前荘官平直澄の討伐で九州へ初遠征。

長承二年（一一三三）平忠盛（清盛の父）が肥前国神崎荘の荘官として日宋貿易に関与。

久安三年（一一四七）源頼朝、河内源氏源義朝の三男として誕生（没…建久一〇年（一一九九））。

仁平年間（一一五一）

・任平四年（一一五四）大藏氏一族で筑後国三原郡板井出身の板井種人、種遠父子は

鎮西平氏与党

宇佐宮領の豊前国仲津郡城井浦（京都郡犀川町）二百七十八町歩を地頭と偽り横領し

幡野浦（犀川町）を濫妨し、更に領地は田河郡柿原名（大任町）、京都郡稗田荘（行

橋市）、仲津郡元永村（行橋市）、仲津郡城井郷（犀川町）、築城郡伝法寺庄（築上町）

に及び城井浦の神楽城を本拠とした。種遠は娘を宇佐大官司公通の子公房に嫁がせ、

豊前国は板井氏、宇佐宮の平氏与党の二大勢力の下に在った。

保元元年（一一五六）

信房誕生

中原信房

城井宇都宮家の祖、信房誕生（没…天福二年（一一三四））。

保元の乱

皇位継承で後白河天皇方（源義朝、平氏）と崇徳上皇方（義朝の父為義、弟為朝）の

の戦いで天皇方が勝利し、崇徳上皇は讃岐に、為義は斬首、為朝は伊豆大島に流刑。

戦功は義朝、恩賞は平氏で源氏に不満鬱積。後白河天皇の親政下、信西が権勢を揮う。

保元三年（一一五八）**信房二歳**

朝廷 後白河天皇が二条天皇に皇位を譲り**院政**を行う。平清盛が太宰大弐任官、四十歳。

院政派の信西と天皇親政派で反信西派の藤原信頼の対立が顕在化。

平治元年（一一五九）**信房三歳**

平治の乱

平清盛が熊野詣中、反信西派の藤原信頼が首謀となり源義朝も加担し、後白河天皇と二条天皇を幽閉、信西を梟首。平清盛は帰洛し官軍として賊軍の反信西派、源義朝軍を破り、一門は京から追放され、東国を目指すも義朝は尾張で謀殺、**頼朝**（十三歳）は捕えられ**伊豆**の蛭ヶ小島に**流刑**、頼朝の長兄義平は京で捕捉され処刑、次兄朝長は負傷がもとで落命した。この乱により平氏政権は盤石化される。

永万二年（一一六六）**信房十歳**

仁安元年（一一六六）八月二十七日に改元

大宰府

太宰大弐平頼盛は遙任せず大宰府に赴任。日宋貿易の權益を守り執権した。  
注・遙任 任官後、本人は現地赴任しない（保安二年（一一二二）以降継続）。

…大府 大宰帥に代わる実質の責任者で、遙任した大宰権帥や大宰大弐の総称。

仁安四年（一一六九）**信房十三歳**

六月 朝廷

後白河院は出家して後白河法皇となる。

治承元年（一一七七）**信房二十一歳**

源頼朝

流刑の地伊豆で豪族北条時政（頼朝の監視役）の長女政子と婚姻。光4

平氏追討

清盛の権勢と平氏一門の横行で後白河法皇と対立、法皇の側近と延暦寺・興福寺等の寺院との紛争の制圧に、朝廷は平氏の武力を利用し三者の対立構図となった。京の東山鹿ヶ谷における法皇の側近による「平氏追討の謀議」が発覚し、藤原成親西光は殺害され、成親の子、成経・僧俊寛・平康頼は鬼界ヶ島に流刑となる。

治承三年（一一七九）**信房二十三歳**

十一月 朝廷

平清盛が後白河法皇を法住寺殿から洛南の鳥羽殿に連行し幽閉して後白河院政が停止。関白を追放し、以仁王（後白河法皇の皇子）の寺領を没収するなど平氏の専横が激化。

〈平氏追討で源頼朝、諸国の源氏が挙兵〉

治承四年（一一八〇）

信房二十四歳

四月 治承・寿永の乱

元暦二年（一一八五）まで。三月に安徳天皇が即位し以仁王が皇位継承を断念して源

頼政の支持を得て、平氏追討・安徳天皇の廃位の令旨を発し、源行家により諸国の源氏に伝えられた。以降諸国で源氏の挙兵と平氏追討がまり各地で内乱が発生。

熊野新宮合戦

平氏より恩顧ある紀伊熊野の平氏別家と新宮那須の反平氏の戦いで、その最中に、以仁王の平氏追討の令旨が事前に漏洩し、別当湛増が平氏に注進した。

平氏が反平氏を追討、源氏勢力同志の対立、平氏勢力同志の対立が発生。

五月 宇治橋合戦

平氏が以仁王と令旨推進の源頼政らを追討し、寺社勢力の協力で宇治平等院に逃れる。頼政の防戦最中に以仁王は南都方面に逃れる途上で南山城の川原で戦死した。

六月 平氏

八月 源頼朝の挙兵

平清盛は京を抜け出し福原へ。

坂東の平氏国衙・在地豪族間の軋轢の中、以仁王と令旨に従い流人頼朝は伊豆・相模・武蔵国の豪族の協力を得て挙兵。伊豆国目代を殺害し伊豆国を制圧。相模国石橋山の戦いで大庭景親に惨敗し真鶴から海路で安房国へ逃れ、房総の上総広常と千葉常胤に

支援を要請し上総に向かう。その後、三浦半島の三浦氏が安房で合流、安房の官人、

上総広常、千葉常胤の援軍を得て武蔵へ進攻し武蔵の足立遠元、畠山重忠が参陣し、

諸豪族と平氏在地勢力を味方にし南坂東の一大勢力となり、父義朝と兄義平が過つて

住んだ鎌倉を拠点とした。鎌倉政権を成立後も支配地域は南坂東に留まった。

頼朝の政務手法は、①臣下に傾聴、合議制、執行③上伸よりも実効支配優先、追認

④長期展望で戦略的思考・交渉力④戸門開放で人材登用⑤不義な相手は絶つ徹底力。

甲斐源氏の武田、信濃の木曾義仲（源義仲）が挙兵。

九月 源氏

十月 駿河富士川合戦

坂東の源氏挙兵で平氏は追討軍を派遣し富士川で平維盛軍と頼朝軍とが対峙。頼朝の大軍攻勢（一節では水鳥群を錯覚）で平氏軍は敗走した。頼朝の平氏追討・上洛の考えに対し上総広常、千葉常胤、三浦義澄らは坂東北部の反勢力（志田（源）義広、新

田義重、佐竹氏、足利忠綱ら）への備えを優先すべきと進言し鎌倉に帰還した。

源氏  
奥州（藤原秀衡）から源義経も参陣。相模大庭氏を処刑。武田氏は駿河・遠江を得た。  
四国伊予、近江、甲斐、信濃で源氏方が挙兵。

源頼朝

十一月金砂城の戦い  
佐竹秀義一族は金砂城（茨城県常陸太田市）に籠城したが頼朝軍に敗退し奥州へ逃亡。  
十一月朝廷・平氏  
福原から京都に遷都。

平氏

南都興福寺焼討（畿内の反平氏寺社勢力の最大拠点平重衡が焼き打ち）

治承五年（一一八二）

信房二十五歳

一月

熊野三山勢力が挙兵し伊勢志摩の平氏勢力と交戦。

二月

朝廷

高倉上皇が崩御し、後白河法皇の復帰を認め院政が再開された。

二月

平氏

平清盛（生一一八年―没一一八一年）が病死。享年六十四。

三月 墨俣川の戦い

総大将平重衡の平氏軍が墨俣川（岐阜県大垣市、現長良川）で源行家に勝利した。

六月

源氏

木曾義仲が美濃、越後まで戦線を拡大し北陸の一大勢力となる。以仁王の子を推戴。

養和元年（一一八一）

七月十四日改元、京で養和の飢饉発生、四万人以上の餓死者、源平は軍事行動できず。

八月

平氏

平宗盛は追討使を派遣。鎮西に平貞能、北陸に平通盛。北陸鎮庄の為、現地の豪族を初めて国司とした。平氏は墨俣川の戦い後、北陸を攻勢するも兵糧不足で撤退した。

八月

朝廷

後白河法皇から頼朝に平氏との和平の提案の密使あり。平宗盛は藤原秀衡を陸奥守に推挙し頼朝を牽制。遠江の甲斐源氏安田義貞の立場が不鮮明で坂東は不安定さが継続。

九月

源氏

肥後の菊池、尾張や美濃の源氏も反平氏追討で挙兵し全国騒乱。

源頼朝は清盛の後継者宗盛に和平を提案するも清盛の遺言として拒否。

養和二年（一一八二）

信房二十六歳

四月

源頼朝

平貞能の兵糧米の徴収取立てに肥後国菊池高直は平家に帰服するとして逃れた。\*24

寿永元年（一一八二）

五月二十七日改元

八月

源頼朝

妻政子が嫡男源頼家を出産。宇都宮朝綱ら出産祝い献品\*24

〈頼朝は野木宮合戦で勝利・坂東平定で平氏追討を加速・城井宇都宮家の祖中原信房が薫陶〉

寿永二年（一一八三） 信房二十七歳

二月 野木宮合戦 常陸の志田義広が足利忠綱らと鎌倉攻めで挙兵。頼朝方小山朝政が奇襲して破る。

中原信房

頼朝方として野木宮合戦に参陣。頼朝は坂東を平定し、平氏追討を加速した。

三月 源頼朝

美濃源氏の本會義仲が、野木宮合戦で敗走の義広と行家を庇護し、頼朝と対立。義仲の嫡子義高を頼朝の長女大姫に婿入りさせることで和議が成立。

土佐、河内、美濃、近江、熊野、伊予、肥後（菊池氏）、若狭、越前、加賀で挙兵。

五月 俱利伽羅峠の戦い 飢饉は小康、平氏は北陸に再攻勢。（石川・富山両県境砺波山）平氏は義仲軍に敗退。

七月 義仲は京に進攻し平氏一門を都から一掃した（義仲は延暦寺に、多田行綱は摂津・河内を席巻、遠江の安田義貞は東海道筋から京へ向かう）。平宗盛は京の防衛を諦め、

安徳天皇（五歳）、「三種の神器」を携えて西国へ都落ち。後白河法皇は比叡山に脱出し平氏と同行せず。義仲の入洛後、軍の略奪等で治安悪化、食糧難から飢餓状態に。

八月 朝廷 後白河法皇は高倉上皇の第四皇子尊成親王（後鳥羽天皇）を神器がないまま即位させた。

義仲が皇位継承に介入し朝廷の反感を買う。頼朝の上洛への期待感が高まる。

九月 朝廷 後白河法皇の命により義仲軍は西国への平氏追討で出陣。

義仲が出陣すると後白河法皇は源頼朝に上洛を催促する使者を送った。

十月 朝廷

十月 水島の戦い 義仲は備中水島で平氏の本拠屋島への渡海を前に平重衡軍に大敗。頼朝の上洛を阻止の為帰洛。頼朝追討を上奏するが聞き入れられず、後白河法皇と義仲の対立は決定的

鎌倉を立出するも平頼盛から都の食糧難の報に上洛を中止（奥州藤原秀衡、佐竹秀義

十月 源頼朝

の進攻の危機回避も背景にある）。義経と中原親能を代官とし上洛させ、後白河法皇

に、東海、東山、北陸各道の国衙領・荘園を元の国司・本所へ返還の要請をし、北陸

道を除いて認められ、領家に従わせる権限が頼朝に認められ宣旨が発せられた。

頼朝は平治の乱で失した官位従五位下に復し、**頼朝の東国支配**が認められた。

頼朝は地の年貢・官物を頼朝が進上する**宣旨**を下した。（頼朝は既に、所領の収公や

御家人の賞罰を行っており、これは朝廷の追認で、鎌倉政権が公式に認められた）。

宣旨による東国年貢の納入に頼朝の代官源義経と中原親能が五百騎余で近江国入り。

十一月 源頼朝

十一月法住寺合戦

義仲は法住寺殿を襲撃し後白河法皇と後鳥羽天皇をを幽閉し松殿師家を摂政とした傀儡政権を樹立。後白河法皇に頼朝追討の論旨を引出した。頼朝方の軍勢規模次第で法皇を奉じ北陸へ下向の計画であったが、千騎の軍勢を宇治、瀬田に分散配置した。

十一月 源頼朝

近江入りした義経は義仲軍に対抗できず足止め。その後伊勢に移動。

寿永三年（一一八四）

信房二十八歳

一月宇治川の戦い

義仲が征夷大將軍となる。頼朝は弟源範頼を義経の援軍として派遣。範頼は三万騎で勢多（瀬田）を攻撃し、義経は伊勢の国人の支援を得て二万五千騎で山城から宇治へ兵を進め宇治川で義仲軍を破り京洛へ進攻した。

一月粟津の戦い

義仲軍は六条河原の戦いで敗れ北陸へ敗走。近江国粟津で義仲は討死した。

一月 平氏

水島の戦いで勝利し摂津福原に戻り安徳天皇を中心に本拠とした。

朝廷

安徳天皇の手許の「三種の神器」を奪還の為に朝廷は範頼・義経に平氏追討を下す。

二月 源頼朝

平氏追討使御家人は二十七名。（たいらのすけもち中原信房は右衛門中将であったが序列されず）

二月 一ノ谷の戦い

源氏の平氏追討軍は平資盛の本陣福原の外周防御三拠点を攻撃、範頼は東の生田口を大手軍五万六千で突破し本陣撃破、義経は三草山に搦手軍一万で勝利し鶴越で軍を二手に分け、夢野口を安田義定らが攻め、義経は西の塩谷口を突破し、一ノ谷の断崖を七十騎で駆け下り平氏を庄原へ平重衡を捕え京に凱旋、名將の評価を得た。頼朝は、範頼は鎌倉に引上げ、義経は代官として京に留め京・畿内・西国の治安維持に当る。平氏はこの戦いで敗れ、海上から屋島に逃れ拠点とした。

四月 源頼朝

頼朝は娘大姫の婿義高（実父義仲）の殺害を計画し、察知した義高は鎌倉を去ったが武蔵入間川で追手に討ち取られた。その後大姫はこれを嘆き僅か二十歳で亡くなる。

元暦元年（一一八四）

四月十六日改元・平氏・寿永三年

五月 源頼朝

源義高の党類が甲斐・美濃両国で反逆の兆候があり制圧に向う。宇都宮朝綱は美濃に

六月 源頼朝

朝廷が頼朝の對抗勢力として甲斐・駿河を領国とする甲斐源氏一条忠頼を懐柔し武蔵

六月 朝廷

守に補任、忠頼の武蔵国への進出を促し頼朝の鎌倉封じ込め策を頼朝が察知し、天野遠景に命じ、頼朝に参上した一条忠頼を誅殺。頼朝は京・鎌倉間の東海道を完全支配。頼朝の推挙に従い、範頼ら源氏三人を国司に任じた。義経はそれから外れた。



六月 下野宇都宮

朝綱が伊賀国壬生野郷の地頭職を拝領、宇都宮社務職（下野国一宮の二荒山神社の最高責任者）を継続して安堵された。光24

七月三日平氏の乱

伊勢・伊賀で平氏残党の蜂起。近江国佐々木荘の佐々木秀義が鎮圧に向ったが討死。義経の西国平氏追討を取り止め、義経は畿内の警護、範頼を西国追討に派遣した。

八月 源頼朝

頼朝に対立、平氏を支援する西国御家人の鎮圧で平氏を瀬戸内海に孤立、討伐する為、源範頼を大将とする平氏追討軍を派遣、鎌倉から二十日間入洛し朝廷より追討使の官符を受けて西進した。従軍の武將は北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、

藤戸の戦い

八月 朝廷

小山朝光、仁田忠常、比企能員、ひきよし和田義盛、土佐坊昌俊、天野遠景ら。範頼軍三万は、備前国で平行盛軍に辛勝。平氏は関門海峡を平知盛が制海していた。後白河法皇により義経が左衛門少尉、檢非違使（天皇の使者で違法・非法の檢察）。

九月

頼朝の周旋で義経は武蔵川越の河越重頼の娘（郷御前）を正室に迎える。鎌倉に公文所（後の政所で鎌倉幕府の財政を司る）を開く。二階堂行政、平盛時らの有能な人材が鎌倉に下向し集まり官僚組織を形成する礎となる。

元暦元年（一一八四）

十一月 源頼朝

義経に対し、西国に所領を得た宇都宮朝綱、成綱らにその支配権を移すように命じた。範頼の西国平氏追討は長門国で足止め。平氏の瀬戸内海西方拠点彦島の平氏水軍に、

十一月・十二月 鎮西平氏追討

九州渡海の進軍を阻まれ、兵糧不足で周防国まで撤退し頼朝に支援を嘆願した。和田義盛などは鎌倉帰還へ動くも押しとどめる。

源頼朝

範頼に食料と船を送ると回答。「安徳天皇、二位尼、三種に神器」の無事確保、現地武士への配慮、関東武士への配慮を範頼に求めた。

〈鎌倉幕府開幕・守護地頭を任免・平氏義経追討・城井宇都宮初代信房が豊前国に本拠・奥州藤原討伐〉

鎌倉時代（一一八五―一三三三）

元暦二年（一一八五）・平氏・寿永四年 信房二十九歳

一月鎮西平氏追討

二十六日、源範頼は豊後国緒方惟栄の支援で食糧と兵船を調達し周防国から豊後国へ渡海を果す。本拠を別府鶴見郷とし、豊前国を北上し彦島の孤立化を図る。

一月 朝廷

二月 葦屋浦の戦い

二月 屋島の戦い

三月十一日 幕府

三月 壇ノ浦の戦い

四月 鎮西平氏追討

頼朝と義経の対立

四月 義経凱旋

源頼朝

五月

六月

範頼軍の別働隊は先遣隊として直接に豊前国北部へ渡海し上陸する。

義経は範頼の窮状を鑑み後白河法皇へ西国出陣を奏上し許可を得た。

一日、範頼は葦屋浦（福岡県遠賀郡芦屋町）で平氏家人原田種直を破り平知盛を拠点彦島に留め置き平氏包囲網ができた。範頼軍は大宰府に向けて進攻した。

十八日、義経は摂津国渡邊津より暴風雨の中を五艘百五十騎で阿波国勝浦に向けて強行出港した。阿波国在庁官人近藤親家の案内で平氏方桜庭良遠の館を襲撃し破る。

二十一日義経は屋島の陣に阿波から入り背後を突いて勝利。平氏の瀬戸内海の制海権を失い長門へ撤退する。義経軍に熊野水軍、伊予水軍が参陣。

頼朝は平氏追討の大功者十二名に感状。（天野遠景もその一人）

範頼軍は、長門彦島の平氏の背後に迫り、義経は水軍を率いて彦島に向かい、平氏の阿波水軍の裏切りで二十四日源氏は壇ノ浦で平氏を滅す（治承・寿永の乱の終末）。

平氏の武將は身を海に投じ安徳天皇は「三種の神器」ともに入水。義経は後白河法皇から戦勝の勅使を受け左衛門少尉を任官、頼朝は平宗盛捕縛の功で従二位に。

頼朝は範頼を九州に留め、神劍の搜索と平氏残存勢力の追討、領地の戦後処理を命じ、処罰は頼朝の専権を通知した。頼朝に梶原景時から義経弾劾の書状が届き、独自行動・

専横や西国平氏追討は範頼の管轄を越権行為、軍監千葉常胤、和田義盛との事前協議に忠実でない規律違反（範頼は遵守）を指摘。

梶原景時の弾劾訴状の他、①当主の許可なく義経が朝廷から御厩司官位を受けた

②戦功は坂東武士よりも自ら率いた西国武士に偏頗恩賞③壇ノ浦の戦いで性急な攻めで安徳天皇、二位尼を自害に追い込み、三種の神器の一つ宝剣を戦利できず、朝廷との取引材料を失った④義経の兵略と声望は後白河法皇の立場を高めた。

義経が平氏から取り戻した三種の神器の一つ鏡爾けいじを奉じて京都に凱旋。

頼朝の内諾なしに朝廷から任官を受けた坂東武士の東国への帰還を禁じた。

義経は壇ノ浦の戦いで捕えた平宗盛・清宗父子を鎌倉に護送。頼朝は義経の鎌倉入りを許さず腰越に留め置き、平宗盛・清宗父子のみ許された。

義経は頼朝に謀叛無きを「腰越状」にして送り届けたが、鎌倉入りを許されず平宗盛

## 七月 鎮西平家没官領

・清宗父子と平重盛を伴い帰洛を命じられた。義経は頼朝を恨み、「坂東に於いて怨みを成す輩は、義経に屬くべき」と詠み、これを耳にした頼朝は義経の所領を没収。義経は命に背き、平宗盛・清宗父子を近江で斬首、重盛が焼打ちした東大寺へ送った。頼朝は没官領と平家与党の原田種直・板井種遠・山鹿秀遠らの所領に地頭を置く暫定期間、中原久経・近藤七国平を沙汰人として下向させ、範頼に上洛の命を下した。沙汰人は「動乱で武士が横領した公領を国司へ、荘園は領家へ渡し、新儀は止め、先規を守り国務・莊務を行う秩序の回復」と命じた（豊津町誌）。

「院宣に従い、何事も奏聞して」後に執行するようにと言明した<sup>※4</sup>。

## 七月 下野宇都宮

文治元年（一一八五）

九州で出家した平貞能が鎌倉の宇都宮朝綱を尋ね、頼朝より朝綱一任の沙汰あり。<sup>※5</sup>八月十四日に改元、**信房二十九歳**。七月九日京都は元暦大地震による被害で改元。

## 八月 源頼朝

源行家（義経方で和泉・河内を支配）追討を佐々木定綱に命じ、鎮西平氏追討で天野遠景は周防国から豊後国へ渡る。

## 八月 鎌倉幕府開幕

源頼朝により開幕（旧来は頼朝の征夷大將軍任官の建久三年（一一九二）を開幕）平氏追討、領地・年貢の遂行の為に頼朝は後白河法皇より**守護・地頭の任免権**を得た。

## 八月 城井宇都宮

鎮西の平氏残党が諸所で蜂起。<sup>※6</sup>下野宇都宮家初代当主宗円の孫**信房**（父は宗房）は源頼朝より豊前惣地頭職、豊前守に任ぜられ平家残党討伐の命で鎮西に下向。豊前の豪族坂井氏を追い、筑後・肥後に転戦し戦功をあげ、後に宇佐宮造宮奉行となる。

## 八月 島津

源頼朝の命で惟宗忠久（島津忠久）が、藤原撰関家筆頭の近衛家が荘主の日向島津荘の下司職として下向し、惣地頭に任じ島津と称す。<sup>※7</sup>

## 朝廷

後白河法皇は、義経、行家、**中原信房**、豊後国の緒方惟栄を味方にし、頼朝軍の周防灘、豊後水道側からの攻勢を想定し豊前・豊後両国の五城（塩田城（福岡県築上町）、大畑城（大分県中津市）、高森城（同宇佐市）、芝崎城（同豊後高田市）、岡城（同竹

田市）を戦線の拠点化を構想していた。<sup>※8</sup>

## 九月 中原信房

義経討伐

朝廷の命で下向した信房の官兵は豊前国仲津郡今井津に駐留し筑前・筑後を平定した。頼朝は京の義経に使者を遣わし、義仲に従った叔父源行家の追討を要請したが断った。

十月 義経討伐

頼朝は義経と行家は同心として義経討伐を決断、家人土佐坊昌俊を京に送り込むも襲撃未遂。これが頼朝の命である事を確認した義経は後白河法皇に上奏し頼朝追討の院宣を得た。行家は四国地頭に補任され反頼朝軍を結集するも与する武士は集まらず。

十一月五日義経討伐

頼朝軍は義経追討で上洛し、義経は行家と共に京を去り豊後国緒方惟栄の手引きで九州へ向かい、惟栄の居城岡城（大分県竹田市）で態勢を再構築しようとして摂津国大物浦（兵庫県尼崎市）から船出したが暴風雨で難破し離散。行家は和泉に潜伏した。

惟栄は捕えられ坂東上野（かみひら）に流罪。その後、九州での平氏追討の寄与で赦免となった。

十一月 義経討伐

千騎を率いた北条時政は後白河法皇の義経追捕の責任を追及し「義経追討院宣」を出し、大江広元が頼朝に「守護・地頭の設置」を進言、義経・行家が西国で再興の為、夫々に「大宰大貳」、「四国地頭」の補任に倣い、頼朝の義経追捕の為の「**守護・地頭の設置の任免権**」を要求し認めら、頼朝は全諸国の軍事警察権を獲得した。

十一月 義経討伐

謀叛人義経と行家を探索と平家方武士の追捕を名目に畿内と近国に守護・地頭を派遣。京都守護兼近国七ヶ国地頭・北条時政、山陽道五カ国地頭・土肥実平・梶原景時、鎮西九ヶ国奉行・天野遠景（『豊津町誌』）

十一月 源頼朝

十一月 朝廷

十二月文治の勅許

守護・幕府が国単位に設置した軍事指揮権を執行する行政官。追捕使が守護の原型。地頭・幕府の荘園・国衙領を軍事・保安・徴税を管理する行政官。在地御家人が任官。東国武士による播磨の院分国倉庫を封印し、朝廷の義経追討の圧迫を図る。

義経の検非違使、伊予守、従五位下兼行左衛門少尉を解任。  
①（寿永二年宣旨で東海、東山、北陸道に加え）五畿内、山陰、南海、西海の諸国を頼朝の御家人に分賜②諸国の庄園、国衙領から段別五升の兵糧米を徴収③諸国の田地を知行④諸国の在庁官人、庄園の下司、惣追捕使を進退。『玉葉』

十二月

頼朝は「天下の草創」として院近臣の解官他、朝政の改革を要求。義経は静御前や郎党らは吉野に隠遁。その後静御前が捕えられ義経は京都周辺の反鎌倉方に身を寄せた。

十二月 鎮西奉行

頼朝は義経の搜索と鎮西における鎌倉幕府の覇権の確立を目的に、初代鎮西奉行天野遠景を派遣。以降、遠景は大宰府の実権を握り建久五年（一一九四）の鎌倉帰還命令

までの十年間奉行職を任じ、肥前国豪族の狼藉の停止、鬼界ヶ島の平氏残党の追討、鎌倉帰還命令の主因として、奥州藤原攻め（文治五年（一一八九））で出兵せず、また、鎮西新儀非法に対する寺社や荘園領側の抵抗、鎮西御家人の協力体制の構築ならず。

文治二年（一一八六）

島津 信房三十歳  
このころ島津宗家忠久は薩摩木牟礼城を居城として勢力を拡大する。

二月 中原信房

藏人所衆の中原信房は造酒正（中原）宗房の孫なので、特に手厚く賞され、この日（二十九日）、近江国善積庄を与えられた。この庄園は圓勝寺領であったが、信房が所望している上に、宗房の過つての功労に酬いる為にこのようにされたという。<sup>※24</sup>頼朝は摂政の近衛基通を辞任させ、兼実を任命させた。

三月 朝廷

四月 義経討伐

義経が京周辺に出没するとの情報に頼朝は追捕の動きを引き締め。

五月 義経討伐

和泉に潜伏の叔父源行家が討死。義経の郎党源有綱、伊勢義盛らが大和で捕えられ、義経の正室として娘を嫁がせた河越重頼も所領を没収され、殺害された。

六月 源頼朝

畿内と近県の徴税未納分を免税。鎮西は法皇の近臣大宰権帥吉田経房の要望で徴収。

文治三年（一一八七）

信房三十一歳

二月 義経

正妻と子と共に伊勢、美濃を経て奥州藤原秀衡へ庇護を求め逃避した。

二月 鎮西奉行

鎮西奉行天野遠景の注進で頼朝は宇佐宮領の神官や名主の本領を安堵。地頭を称す。

九月 中原信房

幕府政所から中原信房に鎮西下向の命が下った。

九月二十二日

『所の衆、信房（宇都宮所と号す）御使として鎮西に下向す。これ、天野藤内遠景と共に、貴海島を追討すべきの旨、厳命を含むに依りてなり。件の島は、古来船帆を飛ばすの者無し。（中略）今度、予州に同意の輩、隠れ居るかの由、御疑貽有るに依り、この儀あり、又、去年（義綱に加担した）河辺平太通綱、件の島に到るの由、聞しめすの間、殊に思し企て給う所なりと云々』<sup>※25</sup>

中原信房

『所衆、信房（号宇都宮所）御使として鎮西に下向す。理由は九州総追捕使天野遠景と共に貴海島を追討せよ』<sup>※26</sup>（文治三年（一一八七）九月二十二日）

（宇都宮信房は八田家系の出で、京で朝廷に勤仕し中原姓を名乗っていた）

注…『吾妻鏡』で記述の貴海島、貴賀井島は喜界島（鹿児島県喜界町）を指すものと考

えられている。治承元年（一一七七）の鹿ヶ谷の陰謀で反平家の俊寛、平康頼、藤原

成経が薩摩国南方の『鬼界ヶ島』に流罪となったが、屋久島の北方の硫黄島（鹿児島県三島村）、又は奄美大島東方の喜界島（同県喜界町）を指すとの両論がある。

## 中原信房

鎮西奉行

## 中原信房

所衆信房は御使として鎮西守護天野遠景に鬼界ヶ島遠征を命じた。天野遠景は貴海島討伐遠征の事前に郎従等を派遣して河辺平太通綱を内偵し確認できたので、鎮西の御家人に出陣を命じたが応じる者がいなく、頼朝に再命令を陳情した。信房は自らの貴海島遠征を主張したが遠景に反対され、一族から派遣することにしたが、摂政九条兼実が貴海島は遠島で遠征の実績も無く計画の中止を頼朝に諫め計画は延期。

## 中原信房

頼朝より鎮西統一の功績で、田川郡伊方庄の地頭職、税所職他、平家方板井種遠の跡地の伝法寺庄等の領地を得た。地頭城井貞種は貴海島に行かず領地没収された。

信房は豊前国入りし、豊前国府に近い仲津郡城井浦（みやこ町木井馬場）を本拠とした。信房は重房、政房、興房、業政の兄弟と共に豊前国入り。

鎮西の平家与党、菊池・山鹿・原田・板井の平家没官領は次のように処分された。

・菊池隆直（京より下向、大宰府府官藤原政則が祖、筑前国山鹿氏と同族）の肥後国の所領は一度没官され後に安堵された。原田種直の所領筑前国怡土郡、本拠的那珂郡は武藤資頼に下給された。山鹿秀遠（肥後国菊池氏と同族）の所領は一品房昌寛（鎮西平氏討伐で源範頼軍に従軍し頼朝の右筆）に下給された。山鹿氏の所領は筑前国遠賀川流域の一带で山鹿荘（大伯父又は伯父の山鹿経政の領地を継承し本拠）、粥田荘（父粥田経遠の本拠、十数郷在り豊前国国境の堺郷を含む）、鞍手・嘉麻・穂波の各郡を支配（以上年代不詳）。板井種遠の所領は宇都宮信房に下給された。（文治三年（一一八七）末頃）板井種遠の所領は豊前国仲津郡城井浦（京都郡犀川町）の神楽城を本拠とし、田河郡柿原名（大任町）、京都郡稗田荘、仲津郡元永村（以上行橋市）、仲津郡城井郷（犀川町）、築城郡伝法寺庄（築上町）。板井氏は任平年間（一一五一―一一五四）に大蔵氏の一族と

文治四年（一一八八）

して筑後国三原郡板井を本拠とし、板井種人、種遠父子は豊前国への進出を図り城井浦（宇佐宮領二百七十八町歩）を地頭と称して濫妨し勢力拡大した。種遠は、娘を宇佐大宮司公通の子公房に嫁がせ豊前国は宇佐宮と平氏与党の二大勢力となった。

三月五日中原信房

信房三十二歳

『所衆（宇都宮）信房が先月頃に鎮西から書状を進上し、貴賀井島（喜界島）に渡る件について色々と言上した。去年島の形勢を探る事が出来たので、海路の次第を図に描かせて献上し、御覧に入れた。これは困難な事であろうと皆が御諫め申し上げたので、

（頼朝は）思いとどまられたが、その絵図を御覧になると、「それほど人に負担をかけることはあるまい」と改めて（渡海を）思い立たれたという。これらの件では信房は特に大功を挙げたので、今日、その恩賞を与えた。』<sup>\*24</sup>

五月十七日中原信房

所衆・藏人所に属し六位役人の略称。天皇の調度、書類保管・機密保持、使節、密偵役。（天野）遠景の一行とする平氏追討が貴海島遠に渡り合戦を遂げ、島内の者どもは既に降伏した、と言上してきた。宇都宮所衆信房は、特に勲功を挙げたという。

信房の言上は、

『遠景巴下の御使ら、貴賀井島へ渡り、合戦を遂げ、かの所、すでに帰降するの由、言上する所なり。しかるに宇都宮所衆信房は殊に勲功を施す云々、ここに信房の近江国の領所は、去るころ、検非違使別当（藤原隆房）の家領に付せられおわんぬ。この大功につき、返し給うべきかの由言上す。』更に、『鎮西の庄は成勝寺の執行である（一品房）昌寛の代官が妨害するため、昌寛の返事を召して下賜されましたが、まだ鎮まらず妨害を企てています』と訴えた。<sup>\*24</sup> 審議の結果は、隆房の事は、後白河院の寵臣であり、他の庄を含め地頭を停止するよう綸旨が下され、鎌倉で手の打ちようがない。

執行の代官については、頼朝が花押を加えて認める。今後、これ以上、鎌倉に訴えても譴責には限度が在る。<sup>\*24</sup> これは『吾妻鏡』文治二年（一一八六）二月二十九日に所衆中原信房が近江国善積庄を朝廷から褒賞されたとあり、その領地を指すと思わ

れる。即ち、その以降の二年間で、**中原信房**は朝廷と頼朝の喧騒の間にあっては朝廷に返還されていたことになる。一品房昌寛に下給された山鹿秀遠の没官領は、**信房**の頼朝への言上で下野宇都宮家三代当主朝綱の次男重業の子家政に与え下向した（諸説あり、昌寛が家政に継がせた、昌寛には嫡子が無く、同じ高階氏系の高階忠業の次男家政に領地を譲った、昌寛が家政を猶子とし領地を継がせた、頼朝の奥州藤原氏の征伐、文治五年（一一八九）後に宇都宮朝綱への勲功として山鹿荘を恩賞として与え朝綱は次男家政を下向させた）。家政の二代後継の家長は宇都宮一族の麻生と名乗る。

### 信房三十三歳

文治五年（一一八九）  
四月 義経討伐

藤原泰衡は、父秀衡の遺言「義経に指図を仰げ」を破り、義経の居館衣川館を奇襲し義経は持仏堂で自害した。

七月奥州藤原討伐

源頼朝軍勢を三手に分けた（大手軍・頼朝は中路より下向、北上する。東海道軍・大將軍千葉常胤・八田知家は常陸・下房両国の兵士を率い岩城経由の海岸線を北上し、遇隈河（阿武隈川）の湊で大手軍と合流。北陸道軍・大將比企能員・宇佐美実政は下道を経て上野国の兵士を率い越後国から出羽国に向い念種関（山形県鶴岡市）で合戦。鎌倉から一千騎が奥州に向けて出陣。宇都宮朝綱（三代当主）、嫡男業綱の父子もいた。

七月 下野宇都宮  
九月奥州藤原討伐

頼朝自ら出陣した奥州合戦で藤原氏を滅ぼした。範頼は最後の参戦となった。

九月末、鎌倉への帰路につく。遠征中は上野・下野両国の年貢を引き当て庶民に迷惑がかからぬように配慮した。また奥州の地は秀衡・泰衡の先例に従うように指示した。源頼朝は奥州の帰路、下野国宇都宮で遠征武運成就の返礼をの社壇に奉幣された。

十月  
建久元年（一一九〇）

四月十一日改元 **信房三十四歳**

入洛。先陣畠山重忠、後陣は千葉常胤。過去十年間奥州藤原の侵攻の警戒から上洛を果せなかった。六波羅の新御邸に到着、宇都宮朝綱らが控えていた。

十一月九日源頼朝

院御所で後白河法皇に謁見。朝廷との協調体制を確認したが、征夷大將軍は与えられず、権大納言に任じられ、常置の武官としては最高位の右近衛大将に任じられた。

十二月 源頼朝

十四日に京を発ち、小脇宿・箕浦宿・青墓・黒田・小熊・宮地・橋本・池田・懸河・



建久二年（一一九二） 島田・駿河国府・奥津・黄瀬川宿・竹下・酒匂・鎌倉に二十九日に帰着した。

一月 幕府 正月恒例の行事として有力な御家人の一人宇都宮朝綱におう飯の供応を課した。  
幕府 新造の御厩に宇都宮朝業（四代当主業綱の子、塩谷氏の養子となる）が馬を進上した。

大宰府 鎮西守護天野遠景は鎌倉幕府の下文を施行（御家人の地頭職の安堵、係争の調整）し、

建久三年（一一九二） 大宰府の実権を掌握。この過分な施行は四年後に新儀非法として頼朝に訴えられ解職。  
**信房三十六歳**

**中原信房** 『袖判（源頼朝）下す 豊前国伊方庄住人 地頭職に補任の事 前所衆**中原信房**

右は前地頭（板井姓、又は大蔵氏の庶家か）直種、貴賀井島に渡らず、また、奥州を追討するの時、参会せず、この両度の過怠に依り、この職を停止すべきなり、よつて信房をもつて補任するなり、限りある課役においては先例に任せてその務めを致すべきの状、件の如し、以て下す』〔佐田文書〕の「源頼朝下文」二月二十八日）

**信房**は、鬼界島に逃げた義経一派の攻略と平氏の強固な地盤であつた九州統一の突破口を開いた功績に対して田川郡伊方庄の地頭職、豊前国衙の田所職、税所職ほか、平家方の跡地である伝法寺庄などを恩賞として領地を得た。信房は豊前に入国すると、豊前国府に近い**仲津郡城井浦**（みやこ町木井馬場）を**本拠**とした。（築上町HP）。

**中原信房** 豊前国仲津郡城井郷（平家没官領板井氏の跡、約二万石）に移り地頭職となつた。  
日向国児湯郡に平家没官領百六十八町の地頭職を得た（建久凶田帳）（年代不詳）。  
征夷大將軍に補任。

七月 源頼朝 上洛して朝廷に鎮西平定を奏上、鎌倉に行き頼朝に鎮西平氏追討の完遂を報告。

八月 中原信房 **『城井谷の蓬花』** 中原信房の朝廷と頼朝への九州平定報告を以つて城井宇都宮家の豊前定着の始りとし、

以降、**中原信房**を「**初代信房**」と称す。  
**二代当主景房**（誕生―死没年不明、父信房より早世）父に随行し九州平定に尽力。頼朝に謁して九

州四奉行に任じられた（『太宰管内志』）。

十月 奥州藤原 藤原秀衡が病死（源頼朝は秀衡の後継、泰衡に義経の捕縛をするように朝廷を圧迫）。

建久四年（一一九三） 信房三十七歳

五月 曾我兄弟の仇討ち。頼朝死すの誤報に政子が動転、範頼の弔意に謀叛の疑いがかかる。

八月 源頼朝 範頼は源姓名で頼朝に忠誠の起請文（きしょうもん）を送ると、頼朝は、源姓は過分として責め範頼を伊豆に流罪とし修善寺に幽閉し誅殺した。結城朝光、梶原景時、仁田忠常も討伐。

建久五年（一一九四） 信房三十八歳（鎌倉に出仕）

五月 下野宇都宮 朝綱（三代当主）が公田百余町を不当支配との下野国司藤原行房が奏聞し、目代を鎌倉に派遣し訴え、真実であれば重科に値するとして朝綱を召還指示。\*24

六月 源頼朝 朝綱に東大寺改修の一貫として観音の改修助成を命じた。\*24

七月 下野宇都宮 朝綱は土佐国に配流、連座で孫頼綱は豊後国、朝業（四代当主成綱の子、塩谷氏の名跡を継ぐ）は周防国に配流裁下の報が一条能保から鎌倉に齎された。頼朝は板垣・朝綱・佐々木の信頼は絶対でその一角が崩れ嘆いた。\*24

（頼朝の働きかけで、朝綱は建久七年（一一九六）赦免され益子町尾羽寺に戻る）

### 初代信房

### 中原信景

建久六年（一一九五）

### 鎮西奉行

信房三十九歳（鎌倉に出仕中）

初代天野遠景が解任され鎌倉に帰還。武藤資頼と中原親能が派遣された。

親能は一年後に京都守護に転進し、資頼は安貞二年（一二二八）は大宰府に留まり、「大宰少弐」の官位を得て、以降武藤氏が世襲し、少弐氏と称した。

武藤家は武蔵国出身、奥州藤原討伐で太宰権少弐原田種直の原田庄を勲功された。

豊前国守護を兼ねた武藤氏の権限は裁判権の無い大犯三箇条に制限されていた。

### 鎮西守護体制

（旧来の権限（九国地頭、国衙領・荘園の年貢の京上、兵糧米徴収）は削減された）  
武藤資頼・三前二島（筑前・豊前・肥後・老岐・対馬）、中原親能（後の大友能直）…  
三後（筑後・豊後・肥後）、島津・南三国（日向・薩摩・大隅）

## 初代信房

下野国より宇都宮大明神を仲津郡城井浦に祀った。

下野国の一族守り本尊の文殊菩薩を勧請し築城郡伝法寺に不老山正光寺を建立した。

二月十四日源頼朝

東大寺供養の結縁へ向かう為、鎌倉を出発。<sup>\*24</sup>

三月十日 源頼朝

石清水（八幡宮）から南都東南院に到着した。信房は先陣の随兵で参列した。<sup>\*24</sup>

三月十二日源頼朝

東大寺供養の結縁供養。<sup>\*24</sup>

五月二十日源頼朝

頼朝と政子は摂津の天王寺を参拝し、随兵として信房も参列した。<sup>\*24</sup>

五月 初代信房

城井郡を本拠とし神楽山城を築城し政所とした。

五月 初代信房

豊前国守護職に補任された。（「紀井宇都宮系図」、但し歴史研究では否定的）

六月二十四日頼朝

源頼朝が鎌倉に向け京を発たれた。七月八日頼朝が鎌倉に到着された。<sup>\*24</sup>

十月『城井谷の蓬花』

信房の命で次弟野仲重房は野峠越えて津民庄、山国川流域への進出の事前調査を実施。

## 野仲重房

伊予守重房（野仲重房）が伊良原を廻り、野峠を下り下毛郡津民庄に移住。

その子孫が内尾・友枝・三尾母・野依・犬丸の緒家となる（『戸原野中氏系図』）。  
信房のあとには景房の子信景が継承した（『大宰管内志』）。

## 三代当主信景

建久七年（一一九六）

信房四十歳（鎌倉での出仕終える）

## 初代信房

この頃、松山城は初代信房が支配していた。後に企救郡の長野氏との攻防の城となる。

一月 鎮西奉行

中原能直が豊前国、豊後国の守護、兼鎮西奉行として豊後国速見郡浜脇浦に上陸した。

## 鎮西奉行

一年前に派遣された中原親能は京都守護に転じ、武藤資頼は大宰府に留まり大宰府守護所で安貞二年（一一二八）まで約三十年間にわたり三前一島の守護の任にあつた。

【少弐家】武藤資頼は頼朝が挙兵した時は平氏に与し、一ノ谷の戦いで源氏方に投降し三浦義澄に預けられ、頼朝の嫡男頼家の元服の式典では故実の知識を認められ、奥州討伐で功を成し頼朝の信任を得た。鎮西奉行の晩年「太宰少弐」に任じられ、公家出身でない初の御家人で。資頼の職は子の資能に継承され、資能は「少弐」と称し、以降少弐家は少弐職を世襲した。これが少弐家の始まりである。

下野宇都宮家三代当主朝綱は公田横領の罪を赦免され配流先の土佐国から益子（栃木県）に隠遁し、自ら尾羽入道寂心と名乗り尾羽寺を菩提寺として整備し、頼朝寄進の

下野宇都宮

多宝塔や浄土庭園、初代宗円、二代宗綱の墓を整備した（『益子町HP』年代不詳）。

## 初代信房

宇都宮信房は下野国から持仏の文殊菩薩を勧進し正光寺（築上町伝法寺）を開いた。信房は晩年律宗に帰依し下野国より二荒大明神を招来し岩戸見神社（築上町伝法寺）を祀った（『築上町歴史散歩HP』年代不詳）。

## 七月 初代信房

### 『城井谷の蓬花』

配流を赦免された宇都宮朝綱を従弟信房が下野国益子へ送り届けた。信房は、下野にある本家宇都宮家を訪れ、下野国から豊前国へ宇都宮大明神の勧請と文殊菩薩を勧進したい旨申し出た。朝綱を下野国に送り届けた後に、幕府へのに出仕を終えて今井津に上陸し豊前国に戻る。一族を神楽城に集め、『新しい国造り』の構想を打ち出し、豊前定着の決意を示した。下野国よりの宇都宮大明神を本拠の仲津郡城井（みやこ町木井馬場）に勧請し、板井の旧領であった伝法寺庄に文殊菩薩を勧進した。

## 十月『城井谷の蓬花』

野仲重房は野峠から下毛郡津民（大分県中津市耶馬溪町）の地へ向かい移住した。

【野仲家】信房の次弟重房が津民庄の地頭として入る。後に、下毛郡野仲郷司職を得て平野部の宇佐宮封郷に進出した（『戸原野中氏系図』）。重房は入部後、城井荘に尾屋敷城（筑久江城）（中津市耶馬溪町柿坂）を築城、建久九年（一一九八）に津民庄に長岩城を築城、ここを本城として野仲と称した。本家城井宇都宮家と共に、豊前国の一大勢力となった。室町時代には大内が豊前国の守護となると臣従し、郡代となり勢力を維持した。天文二十年（一五五一）、大内義隆が重臣陶隆房によって討たれ一時は陶に与した。その後、大友義鎮の弟義長が大内氏の養子となり、敵対していた豊前国の諸氏は大友に従った。弘治三年（一五五七）、義長が毛利元就に滅ぼされると、野仲鎮兼は大友に反旗して長岩城に籠城した。が、大友義鎮に攻められ降伏、北部九州は大友の配下となった。その勢いで大友宗麟は天正六年（一五七八）に日向に侵攻したが、島津に耳川の戦いで敗れ、大友の覇権は九州全土で衰退し、島津は筑前にまで勢力を拡大した。野仲鎮兼は大友を離脱し下毛郡を制圧した。この九州戦国時代の終止符は豊臣秀吉の九州征伐でうたれ二十万の軍勢で島津勢を圧倒し、九州国分令を

建久九年（一一九八）

野仲重房 官領房は反発し、野仲鎮兼も黒田勢に攻められ長岩城は落城し、野仲も滅亡した。信房四十二歳

豊前

津民庄川原口の扇山一帯に長岩城を築城し野仲と称す。二十二代三百九十年間居城。

武藤（少弐）

資頼が三前（豊前・筑前・肥前）の守護となる。\*36

建久十年（一一九九）

信房四十三歳

源頼朝

歿す、五十一歳。嫡子頼家十八歳が二代将軍となったが、独断的で御家人は反発。

正治元年（一一九九）

四月二十七日改元

源頼家

乳母一族の比企氏を重用してきたが、北条氏ら十三人の合議制がしかれた。

十月

源頼家

側近で侍所長官梶原景時が頼家の弟千幡せんぱんを擁立するとの讒言あり、景時は所領で謹慎。

正治二年（一二〇〇）

信房四十四歳

一月梶原景時は鎌倉から追放、京に上る途中で襲撃され一族は滅亡。

建仁元年（一二〇一）

信房四十五歳

### 『城井谷の蓬花』

信房四十五歳は嫡男景房に家督を継がせる。背景は従兄弟宇都宮朝綱の配流を償う為

に幕府に出仕二年間を終え建久七年（一一九六）信房四十歳は豊前に帰国したが、同年大友能直は豊前、豊後国の守護及び鎮西奉行に補任され豊後国に入国する中、信房も豊前定着を決意し国内強化策、特に豊前南部の強化策を打ち出して以来、約五年後に一族の定着を確信できた。建久八年（一一九七）島津忠久が大隅、薩摩、日向国の守護に補任され、対九州御三家への対応の一つとして当主の若返りを図った。

### 二代当主景房

当主となる。歳不詳（生年不詳―没一二二八年）。求菩提山護国寺に九町を寄進。

建仁二年（一二〇二）

信房四十六歳

朝廷

源通親が歿した後鳥羽上皇が朝廷の実権を掌握。幕府より地頭の任命権を復権出来ず。

建仁三年（一二〇三）

信房四十七歳

源頼家

頼家は五月に千幡（十月に元服し実朝に改名）の乳母の夫を殺害、七月より重病に陥り、頼家の乳母方である比企能員と千幡方の北条氏とが対立。頼家の危篤で千幡が後

継となったと朝廷に征夷大将軍任命を要請。比企一族が北条時政によって謀殺された。

頼家には時政討伐の余力はなく將軍職を剥奪され千幡が將軍となった。

元久元年（一二〇四）  
**信房四十八歳**

野仲氏 元久・天福年代（一二〇四―一二三四）ころ、野仲郷司助道が宇佐郡佐野村に在庁。

**七月** 源頼家 伊豆国修善寺に幽閉中に北条方により暗殺された。以降北条時政は幕府の実権を掌握。

元久二年（一二〇五）  
**信房四十九歳**

七月 牧氏の変 北条時政と下野五代当主宇都宮頼綱の姑牧方が源実朝殺害を謀り、頼綱に謀叛の嫌疑。

八月 下野宇都宮 頼綱は出家。幕府評議で小山朝政の追討を決定、頼綱は鎌倉入りし北条義時に面会拒

絶されるも献髪して陳謝。入浴し京嵯峨野小倉山西明寺で隠遁生活、実信房蓮生と号し法然に帰依。財力があり西方寺（西明寺跡）を創建。宇都宮清厳寺、益子地藏院

（尾羽寺）に念仏堂を建立した。頼綱は父同様に歌人の才高く藤原定家と親交し宇都宮歌壇の礎を築いた。弟朝業が幕府に出仕。頼綱の後継は嫡男で三歳の泰綱となった。

承元三年（一二〇九）  
**信房五十三歳**

十二月 初代信房

前宇佐宮大官司公定きんさだの家来が国衙領の上毛郡尻高浦（福岡県吉富町）で、藤原右馬允

秀忠を夜襲で殺害したことを信房が執権北条義時に訴えたが、惣官司公定きんさだを訴えるのは間違いで家来を名立てて訴えるべきと、豊前国守護武藤資頼に下達した（『到津文書』の案文）。これは豊前守護使の力が宇佐郡へと及ぶ中、一方で幕府は宇佐宮の神領内

（内封四ヶ郷・封戸・向野・高家・辛島も含む）への武士の出入りを禁止し、犯罪の重度によっては守護所に渡す事を認めていた。

二代当主景房

西明寺（栃木県益子町）の本堂再建の記念に土御門天皇の御代宇都宮景房が「高野槿」を植樹したと伝えられている。一説には同年景房が本堂を改修、建長七年（一二四九）

五代執権北条時頼が堂宇を再建し寺号を益子寺から西明寺に改名した（以上益子町）。益子地藏院は頼綱の祖父三代当主朝綱が建立し、自らが公田横領の罪で土佐国に配流

『城井谷の蓬花』

## 二代当主景房

され、赦免後に同院で隠遁した。近隣の西明寺は宇都宮、益子両家の菩提寺で頼綱は改修を寄進か。また頼綱は歌人として藤原定家との縁で土御門天皇（父後鳥羽上皇の第一皇子、上皇は院政を執る）は定家を介して西明寺の改修を耳にし、土御門天皇名で植樹を下賜され、頼綱は朝綱配流の連座で豊後国に配流され、朝綱の従兄弟の城井宇都宮信房が二年間に渡り幕府に出仕した報恩として信房に植樹御代を持掛け、信房は嫡男二代当主景房の披露の機会として使わす事を要望し実現したのではないか。

益子西明寺（下野宇都宮城主紀正隆は女婿藤原宗円に譲り益子に移り、西明寺の境内に高館城を築城）と頼綱隠遁の京西明寺（後に西方寺）が同じ寺号とは妙である。  
建保五年（一二二七）  
信房六十一歳（出家）

## 初代信房

## 三代当主信景

高僧の俊苒しゆんぜんと弟子を豊前に招き出家して道賢と号す。俊苒は十七日間滞在し帰落した。評定衆・九州四頭奉行に任じられた。（太宰管内志）

## 『城井谷の蓬花』

二代当主景房が早世し、嫡男信景（生年不詳―没一二四八年）三代当主となる。

五男範景に柿原名を他人への譲渡禁止を条件に譲ったが、範景は他人に譲り渡した。

五代当主頼房が鎮西探題に訴え出て所領を取戻した（以上年代不詳「宇都宮文書」）。

建保六年（一二二八）

信房六十二歳

## 初代信房

大和守中原信房が俊苒に帰依し、上洛して洛東月輪の空海が創建した法輪寺の土地を仙遊寺建立の地（京都市東山区）として寄進した。法輪寺を仙遊寺と改称し、荒廃した寺を修築して泉涌寺とし俊苒を留在させ伽藍を営む。寺名を泉涌寺としたともいう。

【俊苒】真言宗泉涌寺派、派祖。生年一一六六―没一二二七年。肥後国飽田郡の生れ。池辺寺に入り、大宰府観音寺で具足戒を受ける。吉野に遊学し戒律の必要性を痛感し、帰郷して筒ヶ岳に正法寺（熊本県荒尾市）を建立。正治元年（一一九九）、弟子（安秀・長賀）を伴って宋に渡り天台山、径山を遊学。在宋十三年間に、律・禪・天台の三宗と浄土教を修め、帰国後戒律復興を図り布教に努めた。俊苒は鎌倉仏教の開祖、派祖の中で唯一人比叡山に上がらずに入宋を果した。帰国後、栄西の誘いで建仁寺に

留在し、崇福寺（福岡市）にも留在した。寺院建立の為に「仙湧寺勘縁疏」、「殿堂色目」を作り、後鳥羽上皇に奉じた。これが縁で上皇と後高倉院に資金を賜った。宋の法規に則り大伽藍が完成、清泉が湧出して仙湧寺と改めた。貞応三年（一二二四）、後堀川天皇により仁和寺、大覚寺と共に皇室の祈願寺となった。後鳥羽上皇、一条公経、北条政子、北条泰時らが俊苧に帰依した。

建保七年（一二一九）

**信房六十三歳**

一月 源実朝

鎌倉八幡宮で二代将軍頼家の子公暁に暗殺された。二十八歳。これで源氏将軍は断絶。

承久元年（一二一九）

四月十二日改元 幕府は皇族を将軍に迎えようとしたが後鳥羽上皇が拒否。

承久二年（一二二〇）

**信房六十四歳**

幕府

京の九条家より頼経二歳を鎌倉に迎え、北条政子が後見となり、北条義時が補佐した。

承久三年（一二二一）

**信房六十五歳**

五月 朝廷

源氏の血統が絶えたことで後鳥羽上皇は倒幕を決行。京都守護を討ち取り、三浦氏、小山氏、武田氏に執権北条義時追討の宣旨を出した。結果、鎌倉方の三氏は離反せず。

幕府

北条政子は上皇方の追討を理不尽として決起を促し東海道十万、東山道五万、北陸道四万の軍勢で西進した。

承久三年（一二二一）

六月 承久の乱

東海道幕府方が美濃国・尾張国国境の尾張川（木曾川）で待ち受ける後鳥羽上皇方総大将藤原秀康一万七千の軍勢を破る。東山道幕府方の甲斐源氏武田、小笠原は大井戸渡に布陣の上皇方に与した幕府の重鎮大内惟信二千を撃破。藤原秀康、三浦胤義は宇治、瀬田に退却。北陸道幕府軍は砺波山で上皇方を撃破。

朝廷

後鳥羽上皇は比叡山の僧兵の協力を要請するも過去の寺社抑制策が災いし拒絶され、幕府方に宣旨は謀臣の企てとして上皇方の敗将藤原秀康、三浦胤義、山田重忠の逮捕

七月 朝廷

の院宣を下した。三者は東寺に立て籠もるも幕府方三浦義村の攻めで、三浦胤義は自害。山田重忠は逃亡先の嵯峨野で自害、藤原秀康は河内国で捕縛され後に肅清された。三上皇（後鳥羽、順徳、土御門）が夫々隠岐、佐渡、土佐に、後鳥羽上皇の皇子六条



## 六波羅探題

宮は但馬国、冷泉宮は備前国に配流された。仲恭天皇は廢位。後堀河天皇が即位した。幕府は京都守護を廢し六波羅に探題を設置。総大将の泰時、時房は探題で西国武士の監視に当る。開幕以来の二頭政治（鎌倉武家と京公家）から幕府の権力は増し皇位繼承にも影響を及ぼした。朝廷の全所領三千方所が没収され、戦功として幕府方武士に与えられ、執権北条氏と御家人の絆は強固となり、多くの御家人が西国に下向した。承久の乱の恩賞として筑前宗像社領の高向無留木・宮田の二方所の地頭職を得た。

## 初代信房

嘉禄二年（一二二六）

信房七十歳

## 幕府

頼経が四代將軍となった。

安貞二年（一二二八）

信房の子景房が早世。（資料2 下野宇都宮家当主・城井宇都宮家当主<sup>26</sup>）による）

文暦元年（一二三四）

天福二年十一月五日天変地震により改元

八月二日初代信房

歿す（生一二五六年―没一二三四年）。享年七十九。上毛郡如法寺（豊前市）に葬る。

仁治年間（一二四〇―一二四三）

城井宇都宮一族

十三代当主野仲郷司道俊が豊後国田染庄の一部を宇佐吉基に売却。また山国郷得永名井堀村を知行していた（『野中文書』）。宇都宮信房の次々弟政房（生没不詳）が宇佐

弥勒寺領山田庄（豊前市）八十町の地頭となり、成恒（政房の子昌俊又は政俊が祖・本拠は築上郡上毛町）・中間（政房の子房俊が祖・本拠は中間庄（中津市山国町・耶馬溪町）・高野氏を分出した（『紀井宇都宮家系図』）。（年代不詳）

寛元二年（一二四四）

## 鎮西奉行

奉行権限は大犯三箇条（謀叛・殺害の重罪人の追捕、及び京都大番役の上洛を引率する役務）に制限され、鎮西の守護人には広く権限が委ねられた。『鎮西の守護成敗の事に於いては、右大将家の御時より、別儀を以って定め置かるるの間、代々の御下文を帶し、沙汰を致す所なり。余国の守護の沙汰に准じ申すべからざる事なり』\*24。

【鎮西奉行の役務】非御家人の訴訟…大宰府在庁官の最高責任者（「宰府執行藤原朝臣」と署名）・御家人の訴訟…宰府守護所として、当事者の召喚、調書を作成し六波

羅探題又は鎌倉に送付、召喚の催促・上意からの通達取次、判決の執行。

宝治元年（一二四七）

六月 宝治合戦

執権北条氏により御家人三浦氏一族及び与党が自害、討死。得宗専制政治が確立した。合戦で美作前任の国司宇都宮時綱（五代頼綱の長男）・子の時村・同五郎も与し討死。

宝治二年（一二四八）

三代当主信景

歿す。享年不詳。

四代当主道房

当主となる。三十六歳（生一二二二年―没年不明（一二九九年、この頃歿す。\*26））

四代当主道房（通房）は北条得宗方として肥後守護代、鎮西談義所頭人・筑後守護を歴任し、鎮西御三家といわれる小式・大友・島津に次ぐ御家人の地位にあった。

文永八年（一二二七）

大友は三代当主頼泰（神奈川県足柄上郡大友郷、現小田原市）が幕府の命令で、豊後の守護職、莊園や公領に地頭を置く地頭職として下向する。

文永十一年（一二七四）

六月 文永の役

元寇、蒙古軍二万五千船艦九百で来襲。壱岐で守護代、対馬で宗氏討死。

十月十九日

蒙古軍が博多に来襲。暴風雨で二十日に退却。大宰府の責任者少式資能は元と戦う。

四代当主道房

信景の嫡男。薩摩守に叙任、評定衆となる。文永の役で子頼房と共に参戦。

幕府は活躍した武士への恩賞（土地）ができず、武士たちに不満が高じた。一方では、北条得宗家の被官である御内人の専横が甚だしく幕府の凋落へと繋がる。

建治二年（一二七六）

幕府は蒙古軍の再来襲に備え鎮西の諸氏に防塁造りを命じ着手した。

弘安二年（一二七九）

野仲氏の庶子は野仲郷の宇佐宮神官の名田に關与して野仲郷一円の領主化を進めた。

弘安四年（一二八二）

六月末 弘安の役

五月に高麗の兵船が対馬に襲来後、元の本隊と高麗の兵船三千五百、兵十万が合流し志賀島と長門に来襲した。七月一日夜の暴風雨で退却。参陣の鎮西御家人は、筑前勢

（少式、秋月、麻生、宗像、山鹿、香月、中村）、豊前勢（宇都宮一族（宇都宮道房・

頼房親子、野仲長李、山田、友枝、西郷にしごう）、長野）、筑後勢（草野等）。この戦いで

長岩城城主**野仲長李**が戦死。少弐資能は参陣し戦功で三前・杵岐・対馬の守護大名に。

弘安七年（一二八四）

北条得宗專家北条貞時十二歳が第九代執権となる十七年間在職。平頼綱が補佐。

弘安九年（一二八六）

北条得宗専制

平頼綱が鎮西の訴訟で新方針「**鎮西談議所**」の設置・四奉行で合議決裁」を打ち出す。裁断権が幕府北条家から鎮西に移譲され、遠野遠景以来百年振りの出来事。

道房は四奉行（武藤経資、大友頼泰、**宇都宮道房**、渋谷重郷）の一人に登用された。元寇の役の恩賞として上毛郡原井村・阿久封村（安曇村）が与えられた。\*36

正応三年（一二九〇）

四代当主道房

幕府命で足立遠氏の佐田荘（宇佐市安心院町）と安曇村（福岡県上毛町）を交換。

永仁元年（一二九三）

平禅門の乱

鎮西探題

北条貞時が執事平頼綱の権勢を恐れ一族を討滅し政権の実権を掌握。

九代執権北条貞時の下、北条兼時、名越（北条）時家（在位一二九五まで）が派遣され鎮西談義所に代え創始。行政、治安、元寇対策、鎮西の莊園、公領の支配権を強化し、在来御家人に元寇の役の恩賞を与えず、元寇再来の防備を強いて反発を招いた。少弐・筑前、大友・豊後、北条・豊前・筑前・肥前・肥後

永仁三年（一二九五）

四代当主道房

筑後国守護職に補任。\*36

永仁四年（一二九六）

鎮西探題

金沢実政（在位一三〇一まで）が下向し探題職となり、以降は一人体制。

永仁五年（一二九七）

北条得宗専制

平北条貞時が徳政令を發布。普及途上の貨幣経済を打撃。貞時は酒浸りし政務を放棄。

正安元年（一二九九）

四代当主道房

没年・享年不明（この頃歿す）。\*36。

五代当主頼房

当主となる。年齢不詳（生年不詳―没一三三九年）。頼房が鎮西引付衆となる。\*36

頼房は道房の死後から正和三年（一三二四）まで、道房の筑後国守護職を承継。\*36

### 鎮西探題

正安三年（一三〇一）

### 鎮西探題

嘉元三年（一三〇五）

延慶二年（一三〇九）

### 五代当主頼房

応長元年（一三一）

### 北条得宗専制

正和四年（一三一五）

### 鎮西探題

文保元年（一三一七）

### 鎮西探題

文保二年（一三二八）

元亨元年（一三二二）

### 鎮西探題

元亨三年（一三二三）

正中元年（一三二四）

### 五代当主頼房

正中の変

評定衆（合議議決機関）、引付衆（御家人の領地訴訟裁判機関）が付与、設置された。北条得宗専制、北条師時が第十代執権に、七代執権政村の嫡男北条時村が連署となる。先代実政の子、金沢（北条）正顕（在位一三一五まで）が探題となる。

没官の田河郡柿原名地頭職板井兵衛尉種遠から信房が得た地を中内信景へ伝領。

北条貞時が死去。子の高時十四歳が執権と成る。長崎高綱、安達時顕が補佐し実権を握り政権は約十年間は安定したが得宗の地位は低下し形骸化した。

貞時は地方に対し強権を揮い北条一門の知行国を増やすも、御家人は疲弊し新興勢力（悪党）の出現を呼び込み政権は揺るぐ。

先代の正顕の子、金沢（北条）種時（在位一三一六まで）が探題となる。

五代執権時頼の弟時定の孫、阿蘇（北条）随時（在位一三二一まで）が探題となる。

大覚寺統の後醍醐天皇（第九十六代天皇、南朝の初代天皇、在位文保二年（一三二八）—延元四年（一三三九））が即位。院政を廃止し親政を打ち出し、倒幕を画策。

幕府三五の執権北条守時の弟、赤橋（北条）英時（在位一三三三まで）が探題となる。後醍醐天皇が日野資朝、俊基を東国と畿内に送り込み倒幕勢力の結集を計る。

本拠地を仲津郡城井浦から築上郡本庄に移す。天徳寺を造営し永代の菩提所となす。注・鎮西宇都宮氏菩提寺月光山天徳寺は正慶元年（一三三二）五代当主宇都宮頼房が建立した寺である。\*36

後醍醐天皇の倒幕が発覚し未遂。日野資朝ら斬首。天皇の処分なし。

元徳二年（一一三二） 後醍醐天皇が秘かに関東調伏の祈禱を行う。寺社勢力に接近するも支持得られず孤立。  
十二月 弥勒寺造営料の奉行に**宇都宮高房**（後の**冬綱**）、大友貞宗に命じた『小山田文書』

この高房の任を以って**五代当主頼房**から実子を差し置いて**下野宇都宮高房**（**冬綱**）に当主が引き継がれたとの説もある。

〈**城井宇都宮家頼房の決断と実行…本拠の移転、一族広域連合構想、当主交代の模索**〉

元徳二年（一一三三）

#### 五代当主頼房

長男**豊房**が伊予国守護となる。予てから頼房は**下野宇都宮景泰**の嫡男伊予守護**貞宗**に**豊房**を入嗣させ守護職を譲る事を持ち掛け、これが実現した。

#### 『城井谷の蓬花』

**五代当主頼房の決断**。城井宇都宮家開祖**信房**の百年忌の遠忌を正慶二年・元弘三年（一一三三）に迎え、城井宇都宮家開祖**信房**の宿願であった重大な決断を行った。

一、正慶元年・元弘二年（一一三二）に本拠を城井浦から本庄（築上町）に移す。

一、同年に信房公の遠忌は新たに建立する天徳寺で行う。

一、九州四国の宇都宮家一族の連帯戦略として嫡男**豊房**を伊予国入りさせる。

一、次代当主について腹案はあるが、現在は開示する時にない。

次代当主の腹案と背景

一、下野宇都宮家九代当主公綱の次弟**高房**を城井宇都宮家次代当主の有力候補とした。

一、九州の御三家**島津**・**大友**・**少弐**、加えて**菊池**と中国の大内の覇権争いの渦中で、

大宰府も含め対等できる武威高く、朝廷・幕府の信頼が厚い人物を当主に迎える。

一、一国至上統治から広域連携が必要。北条得宗家の専横への反乱は中央、地方で必

至。豊房の伊予入りは高房の城井入部前とし内紛を回避し、むしろ瀬戸内海道、

西四国での地歩を築かせたい。後醍醐天皇はいずれ九州に官軍を派遣するは必定。

願わくは高房が官軍を率いるその時期を待ち当主交代する。

一、下野宇都宮家には豊房の伊予国守護補任・入嗣、高房の城井入嗣・当主後継を一体で交渉する。

北朝(京都) ……元徳三年(一一三二) — 明徳五年(一一三九四)

南朝(奈良吉野山) ……元徳元年(一一三二九) — 元中九年(一一三九二)

南北朝

鎌倉時代末期、北条得宗家の権勢下、元寇後の警備役負担、恩賞の土地の枯渇で御内人(得宗被官)の専横が横行し、武士団の不満が鬱積し、幕府は債権者に対する放棄を徳政令で促すが効果なく幕府の権威は失墜した。朝廷は二つの皇統の両統迭立により派閥抗争もあり幕府の統制を困難にした。その中で後醍醐天皇が即位すると新政を打ち出し、天皇自ら執政統治することに舵を切り、幕府打倒を画策する。しかし目論見が発覚して隠岐島に流された。その後、島を脱出して挙兵、足利尊氏の寝返りもあり皇位復権を果し倒幕となった。後醍醐天皇の新政は武士団を牽制するもので尊氏は源頼朝の歩んだ実効支配を進め、政権を京に樹立し、天皇は吉野に南朝を創始。この南北朝の代理戦争が全国各地で勃発した。

天徳三年・元弘元年(一一三二) 元徳三年八月九日改元。

四月 元弘の乱 後醍醐天皇の第二次倒幕計画が六波羅探題に密告された。幕府は鎮庄のため島津貞久

と宇都宮高房(後の冬綱)を先発軍として鎌倉から上洛させた。

八月 元弘の乱 後醍醐天皇が第二次倒幕として山城国笠置山で挙兵。呼応して皇子護良親王は吉野で、

楠木正成は下赤坂城で挙兵。幕府は京の鎮庄に足利高氏、新田義貞ら二十万を派遣。

九月 朝廷 天皇方が籠城する笠置山は陥落。後醍醐天皇は捕縛され吉野も陥落。光厳天皇が即位。

十月 倒幕方 楠木正成は抗戦後、下赤坂城に放火し行方をくらます。十一月足利高氏は鎌倉に戻る。

宇都宮豊房 伊予国入り。伊予宇都宮家初代当主となる。下野宇都宮景泰の伊予入りに続いて豊房

が景泰の嫡男貞宗に入嗣し伊予入り。大洲を拠点に地藏ヶ嶽城(大洲城)を築城した。後に景房は懐良親王方として城井宇都宮家を經由して筑後宇都宮家の開祖となる。

天徳四年・元弘二年(一一三二)

三月七日 朝廷

後醍醐天皇が隠岐島に流刑となり六波羅を出発。陸路で播磨、美作、出雲より出港し隠岐島に上陸。皇子護良親王や河内内国の楠木正成、播磨国の赤松則村らが倒幕を継続。

四月 倒幕方 楠木正成が下赤坂城を奪還。和泉、河内国を制圧した。

正慶元年・元弘二年（一一三三二） 天徳四年四月二十八日改元。

五月 倒幕方 楠木正成が和泉・河内を制圧し撰津国住吉、天王寺に進攻し六波羅軍五千を破る。

七月十九日六波羅 六波羅は坂東一の弓取り**宇都宮公綱**（十四代執権北条高時の時に**高綱**より公綱に偏諱）に楠木正成討伐令を出した。撰津国天王寺に布陣したが交戦なく三日間で京に帰還。

〔城井宇都宮家頼房の決断と実行・本拠を城井浦、神楽城から城井谷本庄へ移転〕

〔城井谷の蓬花〕 豊前国衙在庁職頼房が月光山天徳寺（築上町本庄）を建立。その裏山に本庄城（山城標高三百十五米、別名若山城）を築き、豊後国泉福寺（大分県国東）一世蔵山融澤和尚を迎え開山し、後に城井宇都宮家の菩提寺となった。（月光山天徳寺縁起）\*12

五代当主頼房

（当時、天徳寺は平地にあり、現天徳寺一帯を居館としていた）

城井宇都宮家開祖信房の百年忌の遠忌を天徳寺で実施。頼房は外交手腕に長け、防備策として求菩提山の修験道山伏との結束を図り、総本山の彦山との結束を強化した。

九月 幕府

十一月 門、甲斐、信濃や北陸道七ヶ国、伊予河野通盛が四国勢を率いて三百艘で尼崎に上陸。護良親王が吉野で挙兵し倒幕の令旨を出し、楠木正成が河内国金剛山で挙兵した。

正慶二年・元弘三年（一一三三三）

一月 幕府 北条高時（十四代執権）の命で**宇都宮公綱**が紀清両党を率いて上洛した。

一月 倒幕方 楠木正成が天王寺の六波羅軍を攻撃した。赤松則村が播磨苔縄城で挙兵。

一月 幕府 楠木正成は金剛山の千早城、上赤坂城、下赤坂城で幕方勢力を釘づけにした。

二月 伊予 倒幕方拠点（吉野、金剛山、赤坂）を攻め平野将監を金剛山、護良親王を吉野で破る。伊予守護**宇都宮氏**は河内攻めに出陣中。河野通盛は四国勢を率い三百余艘で上洛中。

閏二月 伊予 伊予の倒幕勢力が挙兵。喜多郡根来城の**宇都宮氏**の家人を攻撃した。\*12

閏二月末―三月 伊予 倒幕勢は府中（今治市）の守護**宇都宮貞宗**の居館を攻め石井浜で合戦に及んだ。\*12

閏二月末―三月 伊予 倒幕勢は再び根来城を攻め、十二日、反乱制圧で渡海してきた長門探題北条時直

を倒幕勢（土居通増・得能通綱）は撃退した。\*32

閏二月二十四日  
倒幕方赤松則村が尼崎で幕府軍を破る。後醍醐天皇が名和一族の支援で隠岐島を脱出。  
閏二月二十八日  
倒幕方名和長年は伯耆船上山（鳥取県琴浦町）で挙兵し後醍醐天皇を迎えた。

船上山の戦い  
後醍醐天皇は諸国の武士、幕府方の足利高氏、新田義貞にも倒幕の論旨を発した。

閏二月 幕府  
名和長年軍百五十騎は幕府軍二千騎を破る。後醍醐天皇は五月初旬（八十日）滞在。  
肥後菊池武時、阿蘇惟直らは幕府の要請で上洛中、備後鞆ノ津で異変を察知し引返す。

三月十一日 幕府  
肥後菊池武時、阿蘇惟直らは幕府の不穏な動き（論旨）を察知し九州の地頭御家人たちを博多に招集。肥後国菊池武時は阿蘇惟直ら一門三百騎を率い遅参。侍所より非難された。

三月十二日 九州  
菊池武時は後醍醐天皇の論旨を受け、筑後の少貳貞経、豊前の大友貞宗に倒幕の同調

三月十三日 九州  
を求めると叶わず子の武重と拳兵沖の浜の宿所を出発し鎮西探題北条英時を攻めた。

少貳、大友数千の兵の援軍により反撃され武時は討死、武重は阿蘇惟直は肥後菊池に逃げ帰った。その後、豊前守護糸田貞義、大隅守護桜田師頼の北条一族が博多入り。

正慶二年・元弘三年  
(一一三三)

探題英時の養子肥後国守護規矩（北条）高政が博多に駆けつける。

三月十五日 九州  
探題英時は規矩高政に倒幕方菊池・阿蘇の追討を命じ出陣した。

三月十六日 九州  
後醍醐天皇論旨（宛・大友、少貳、菊池、平戸、日田、三窪の各氏）の使者捕縛。

三月二十日 九州  
規矩高政の追討を受けた倒幕方菊池・阿蘇氏は菊池から阿蘇に退却、二十五日には追討軍が阿蘇大宮司館を放火され日向国鞍岡に逃げるも追われ高千穂山中に潜伏した。

三月下旬  
関東へ送った早馬が帰着し倒幕方は金剛山を堅持し京へ進行する勢いの形勢が伝わる。  
楠木正成追討で、鎌倉の大將軍名越（北条）高家と足利高氏（妻子人質）に出陣命令。

三月二十二日九州  
高氏は三河国矢作（岡崎市）で密使を伯耆国の後醍醐天皇に送り味方する旨伝えた。

三月二十七日幕府  
赤松則村は山崎と石清水八幡を陣地とし三月末に続いて六波羅を攻めたが陥落できず。

三月三日六波羅探題  
足利高氏の上洛（十六日に京入り）の報により石清水八幡に待機。

四月四日 九州  
規矩高政は菊池・阿蘇追討で日向国より博多に帰還した。

四月八日 倒幕方  
赤松則村は伯耆船上山から上洛した千種忠顕と共に京に進攻。

四月 鎮西探題  
探題英時は手薄となった博多を、安芸国三池氏を招集して守備させた。



正慶二年・元弘三年（一三三三）

四月二十七日

久我暲の戦い

四月二十九日

名越高家と足利高氏は赤松討伐で六波羅から出陣し、大将高家が久我暲で赤松の伏兵に討ち取られた。高氏は船上の後醍醐天皇方討伐に向かうとして丹波篠村へ向かう。高氏は母親の故郷の丹波篠村八幡宮（祭神は八幡太郎源義家）で幕府に反旗を翻し倒幕方として挙兵した。高氏は諸方の武士に倒幕の催促状（「伯耆国より勅令を蒙り候の間、参じ候、合力候はば本意に候、恐々謹言」）を送り、九州の有力、少貳貞経（六十一歳）、大友貞宗、島津貞久（六十四歳）、阿蘇惟時、宇都宮頼房へ送り軍勢催促が五月五日頃には諸氏の手許に伝わったか。東国では上野国新田義貞にも発給。

### 鎌倉幕府滅亡・建武の新政・足利武家政権誕生・尊氏九州平定

五月七日

### 六波羅探題陥落

天皇方に寝返った足利高氏は二万三千騎の軍勢を率い赤松則村ら老ノ坂を越え軍を三手に分け六波羅探題を攻撃し陥落した。探題北方北条仲時は南方時益、光厳天皇を擁し後伏見上皇、花園上皇らと東国へ逃れ、近江国で時益は討死、仲時は佐々木道誉に阻まれ同国番場（米原市）で二日後に一族四百人と自刃。天皇、上皇は道誉により京に連れ戻された。高氏は六波羅探題陥落後に九州の少貳、大友、島津に軍勢催促。

五月八日 倒幕方

五月十三日 頃九州

五月二十二日 幕府

### 鎌倉幕府滅亡

新田義貞が上野国新田庄で挙兵。十五日義貞が武蔵国分倍河原で北条泰家を破る。高氏から六波羅探題陥落と軍勢要請で少貳貞経、大友貞宗らが天皇方に転じた。新田義貞は小手指原、久米川、分倍河原、関戸の各戦いで幕府勢を破り、約十万人の大軍で鎌倉を攻め、義貞は引潮時に稲村ヶ崎から鎌倉に入り北条氏一門を破り幕府は滅亡した。執権北条守時が家臣と共に自害。幕府方の九代当主公綱は南朝方についた。

五月二十五日

倒幕方

五月二十五日

### 鎮西探題滅亡

少貳貞経、大友貞宗らが倒幕方に転じ、島津、宇都宮、伊東、高木、龍造寺、大村各氏に呼びかけ北条英時を攻め鎮西探題は滅亡。探題方の松浦党、草野、山鹿、宗像の各氏。探題英時、先々代種時が自害。二十八日豊前下毛郡の御家人田口信連が高房の花押の鎮西探題攻めの証判を得た。同田口氏は証判を七月八日大友貞宗、十日少貳貞

経よりも得ている（このことは高房は既に九州に下向していたか）。

六月五日

新政

六月十三日

新政

護良親王が帰京。

南北朝時代（一三三三—一三九二）

七月 建武の新政

後醍醐天皇が自ら政治を建武の新政として司る親政が十七日に始まる。

肥後国菊池武重は建武の新政で亡父武時の功績で肥後国一国を与えられた所領した。

新政の革新性は天皇親政下で「地方改革」を推進。国司と守護を置き、国司を介して

地方行政を直接執行した。その恩恵は公家に厚く武士に薄く不満が鬱積し、年末には

公家と武家との対立が表面化し、北条の残党は諸国で蜂起した。

八月五代当主頼房

後醍醐天皇の供奉で上洛した頼房は戦乱で流浪の第九十三代後伏見天皇の第六又は七皇子長助法親王（生年一三一八—没年一三六一、北朝方初代光厳天皇の弟、法名助有）を如法寺（初代当主信房の子信政が初代座主）に招く。

八月 足利尊氏

高氏は後醍醐天皇の諱尊治から偏諱を受け改名（勲功で従三位に昇叙、武蔵守となる）

九州の国司・守護

筑前・築後・豊前三国の国司・在京の菅原氏・万里氏・坂上氏を任命、守護は筑前・

宇都宮高房（冬綱）

豊前・少弐貞経、筑後・宇都宮高房、豊後・大友貞宗に補任し肥後国菊池氏を牽制。

十二月 当主頼房

頼房の招きで長助法親王が如法寺に座主として入る。後に彦山の靈仙寺（現靈泉寺）

に移り彦山座主となる。僧職は妻帯しない原則に反し親王は頼房の弟信勝の娘を正室

として妻帯したため、筑前黒川庄（福岡県朝倉市）の黒川院を院室とし、座主世襲は

第十四代舜有まで続き、従来の座主輪番制が廃止された。

宇都宮一族

建武元年（一三三四）

一月二十九日改元

一月 九州

北九州で元鎮西探題金沢政顕の子、規矩高政（本拠規矩郡、元肥後守護）は筑前山鹿、

芦屋辺りに潜み、筑前帆柱山城（北九州市八幡西区）で挙兵、弟糸田貞義（本拠田河

郡糸田莊、元豊前守護）は筑後堀口城で挙兵、他に元得宗被官の門司、山鹿や北条と

縁のある長野、星野、間註所が反乱に加担した。後醍醐天皇の命で宗像氏長が帆柱城を攻めたが、門司城の長野政通・貞通兄弟により裏を衝かれ敗退。三月に少弐、松浦、原田、秋月諸氏が帆柱山城攻め、大友、菊池諸氏は筑後堀口城攻めた。

五月 新政  
諸国の本家、領家職を廃止。徳政令を發布、寺社の支配を開放する官社開放令が出た。  
建武政権は上洛の少弐貞経（六十二歳）と**宇都宮高房**（四十六歳）らを九州に下向させ、大宰府を拠点に北部九州の反乱の鎮圧に当らせた。

八月 新政

八月十二日 九州  
上洛の少弐貞経が在京の田口信連に規矩高政、糸田貞義の乱の鎮圧を命じた。たご

規矩高政は帆柱山城を拠点に少弐・大友と抗戦七カ月に及び最後は豊前虹山城（北九州市小倉南区蒲生）へ逃げ、長野は降伏し少弐、長野により鎮圧された。

九月 新政  
訴訟機関雑訴決断所八番を設置。一番畿内（十四人の中に**宇都宮公綱**がいた）、二番東

海道、三番東山道、四番北陸道、五番山陰道、六番山陽道、七番南海道、八番西海道。  
十月 新政  
將軍を解職された護良親王は尊氏打倒を鮮明化したため拘束され鎌倉に配流となった。  
東国支配の強化で陸奥將軍府を設置。將軍義良親王、北畠親房、頭家父子が補佐。

十二月 新政  
鎌倉將軍府が設置され、成良親王が將軍、尊氏の弟足利直義あしかがたよしが補佐。

建武二年・建武二年（一三三五）

新政  
後醍醐天皇の独裁体制である建武の新政が民心の信頼を失った。

失政の原因は後醍醐天皇は諸令（旧領回復令、寺領没収令、朝敵（北条家一族）所領没収令等）の發布をもって、旧来の土地所有権を無効にし訴訟申請により天皇の裁断の論旨を出すことで支配の権力構造を明確にしようとしたが、処理能力を超えた膨大な訴状の量、裁断の遅延、急場凌ぎの訴状決断所の設置と増設、実力主義で多様な構成員と裁断の内部対立の増大、後醍醐天皇のもと機関恩賞方による倒幕方の論功行賞で不公平な処理により武士は勿論、民心からの信頼を失った。

七月 中先代の乱

第十四代執権北条高時の遺子時行が信濃国の諏訪氏の支援を得て幕府再興を掲げ信濃

八月 足利尊氏

で挙兵。足利直義を破り鎌倉を一時占拠。この最中直義の命で幽閉の護良親王を殺害。後醍醐天皇の許可を得ず京から鎌倉に向かい、時行を相模川の戦いで破り乱を鎮圧。尊氏は鎌倉に留まり独自の武家政権樹立に動き、恩賞を独自に仕切る。

十一月 足利尊氏

新田義貞を天皇方の奸として追討を後醍醐天皇に上伸。

新政

恩賞給付は後醍醐天皇の専権事項であり尊氏を逆族として義貞に尊氏討伐を命じた。

新作川の戦い

新田義貞は尊良親王を奉じ、副將軍に弟脇屋義助、尊氏討伐軍は東国勢千葉貞胤、

手越河原の戦い

宇都宮公綱ら、西国勢は大友貞載、宇都宮公景、大内氏ら総勢十萬。三河国、駿河国

の戦いで足利軍を破り、以降は軍勢を東海道と東山道の二手に分け、義貞が箱根峠に、尊良親王・義助は足柄峠に進軍した。奥州から北畠頭家が南下し、尊氏は赦免を求めて隠居するが、足利直義らの足利方が劣勢と見るや再起する。

建武二年・建武二年（一三三五）

十二月

箱根峠で新田軍は足利直義に勝利したが、尊氏は足柄峠に向い新田軍を竹之下（静岡

箱根・竹之下の戦い

県小山町）で破り、義貞は狭撃を恐れ京に退却し尊氏は上洛を目指した。新田軍の大

友貞載（父は貞宗で鎮西探題陥落の立役者の一人）、出雲国守護で後醍醐天皇の伯耆船上山の挙兵に呼応した塩冶高貞が尊氏方に寝返り新田軍は敗退した。

### 『城井谷の蓬花』

宇都宮公景（五代当主頼房の実子三男、後の佐田家の祖）は大友貞載と共に新田軍に

従軍。竹之下の戦いで尊氏方に敗れ大友貞載と共に尊氏方に寝返る。その後、尊氏の九州での再興の西下に同道し、尊氏が上洛する際にも同道、室町幕府開幕後に、大友氏泰と共に九州に帰還し、公景は城井谷に戻る。

建武三年・延元元年（一三三六）

一月十日山崎の合戦

尊氏は大友氏泰、宇都宮公綱らを降し入京。氏泰、公綱は尊氏方に。天皇は比叡山に。

一月

北畠頭家が宮方勢に加わり楠木正成・新田義貞らの攻勢で尊氏は京で破れ京を逃れる。

一月豊島河原の戦い

撰津で尊氏は新田軍に大敗し播磨室津に退く。大友氏泰は尊氏に九州での再起を進言。

二月三日

宇都宮公綱は宮方に戻る。

二月十二日 尊氏

播磨の赤松則村が尊氏を支援し兵庫津より大友氏泰の船で九州へ向かう。千葉胤貞、相馬親胤、**宇都宮公景**らが随行。赤間関には頼尚が五百騎を率いて尊氏を出迎えた。

二月 足利尊氏

九州の有力大名は尊氏方に反転し、北部九州の宗像氏も趨勢に沿って尊氏支援に反転。尊氏は三年前に歿した大友六代当主貞宗の子息兄弟を自分の猶子として味方につけ、こほんのみぎやうしよ御判御教書を与え、五男元服間近の千代松丸（七代当主十五歳）に尊氏の「氏」を与え氏泰と名乗らせ、六男氏宗、七男氏時（八代当主）と偏諱した。

〈城井宇都宮家頼房の決断と実行…当主交代五代頼房から六代高房（冬綱）へ〉

二月『城井谷の蓬花』下野宇都宮家八代当主貞綱の子高房四十八歳（生一二八八―没一三六八）、が五代当

五代当主頼房主

六代当主高房（冬綱）

頼房（年齢不詳六十歳前半、没一三三九年）に入嗣、六代当主高房（後の冬綱）となる。下野九代当主公綱（生一三〇二―没一三五六）の兄（興禅寺、公綱の墓に貞綱の二男とある）。家名「宇都宮」を旧本拠地豊前国仲津郡城井浦の「城井」を由来として

家名変更した。頼房が高房を新当主に迎え入れた背景は、高房の器量、朝廷と幕府からの信頼、武威高く官軍を率いて北条残党の鎮圧で九州に下向し、中央で尊氏の敗退で九州での再興を、菊池氏を除く主力大名が支持に動き、九州で唯一の縁、城井宇都宮家が頼りで高房自身も官方から尊氏方に同調した。少弐頼尚の赤間関での尊氏の出迎えに先立ち、高房は城井宇都宮家の本拠本庄に立寄り、当主頼房に尊氏方への転向を促し、対して頼房は高房の養子入りを要請した。後に赤間関で尊氏を出迎えた。

二月 菊池

肥後国の国人領主菊池武重は在京で出仕中。在国の弟武敏に尊氏の九州下向を知らせ、尊氏討ちを命じた。武敏は軍勢を率いて八代から筑後国に入り高良山に本陣を設置。

二月 大宰府

少弐父貞経は大宰府を守備。菊池軍は守備手薄の大宰府に進軍し少弐勢は水城の渡り（太宰府市）で敗れ、大宰府を攻略し博多へ進軍。貞経は有智山城に籠るも菊池勢と秋月氏らによって攻められ味方の裏切りで一族二百数十人と討死。軍備品は焼失。

三月多々良浜の戦い

尊氏は菊池勢を破り九州を平定し上洛を目指した。二日尊氏は一千の兵力で本陣宗像神社から出陣し香椎宮を経て多々良川の手前に布陣した。

尊氏は川上に弟直義、高師泰、少貳頼尚、川下に大友氏泰、島津氏貞、原田種時、千葉胤貞、城井宇都宮家六代当主当主高房(冬綱)ら。菊池勢は宮崎八幡宮を背に、九州の豪族の大半で二万騎、総勢六万。肥後国菊池武敏、筑前国秋月種貞(六代当主)・秋月種道、肥後国阿蘇惟直、筑後国蒲池武久、星野家能、草野長久、他有力武士の松浦、原田(種時の嫡子)。戦況は、尊氏軍の圧倒的な兵力差の中で追風を背には奮闘し、菊池軍の一部で尊氏に傾倒する松浦党が尊氏方に寝返り勝利した。菊池武敏は肥後に退却、阿蘇惟直は肥前で戦死、秋月種道や蒲池は大宰府で討死した。尊氏は大宰府に入り、九州の諸将が足利方につき宮方勢力の掃討を開始した。

建武三年・延元元年(一三三六)

三月八日

一色頼兼が菊池武敏の黒木城も攻略し、武敏は豊後玖珠城に逃れ大友氏泰の長兄貞順と七カ月抵抗した。宇都宮一族野仲の庶子野依道棟も攻略に参陣した。尊氏は二十日間で九州を平定し、守備(事実上の国分)配置を決定した。一色範氏・少貳頼尚(筑前)、宇都宮高房(豊前)、大友氏泰・都甲信世(豊後)、相良長氏(肥後)、深堀時広(肥前)、伊東祐持・土持宣栄(日向)、島津貞久(薩摩)、畠山義頭(大隅)。

六代当主高房(冬綱) 戦功により尊氏は豊前国の守備に高房を指名。

六代当主高房(冬綱) 尊氏方として豊前宇佐郡の妙見氏、安心院氏を降し、子親綱に宇佐郡を守備させた。

四月 足利尊氏 尊氏は上洛の態勢を整え、一色範氏、仁木義長を九州に抑えとして残し、大友・少貳・千葉・宇都宮公景らと共に長門国府中へ博多より出帆した。

五月 足利尊氏 鞆津に入港。尊氏は海路、直義は陸路で上洛。尊氏は途上で光厳上皇の院宣を得た。

五月 撰津湊川の戦い 尊氏は楠木正成・新田義貞を破る。

六月 足利尊氏 後醍醐天皇を幽閉し京都を制圧した。宇都宮公綱は出家し吉野で還俗し左少将となる。

八月十五日 尊氏 尊氏は光明天皇(光厳上皇の弟、北朝第二代天皇)を擁立。征夷大將軍に補任された。

〈建武の新政崩壊・室町幕府開幕・軍務尊氏政務直義兄弟の二頭体制と南北朝が諸国を翻弄〉

十一月建武の新政 崩壊。足利方と比叡山の後醍醐天皇との和議成立。光明天皇に神器と皇位を譲った。

十一月 建武式目

十二月 南朝

鎮西探題

南朝

建武四年・延元二年 (一三三七)

九州南北朝

曆応元年・延元三年 (一三三八)

九州

曆応二年・延元四年 (一三三九)

八月 南朝

十二月 九州

興国二年 (一三四一)

室町幕府

九州南朝方

七日尊氏は建武式目十七条を制定し開幕。式目は少弐頼尚含む旧幕府吏僚八人が提出。

尊氏が軍事、弟直義(たたと)が政務の二頭体制。尊氏は権大納言に任じられ、自称「鎌倉殿」。

後醍醐天皇は吉野に脱出し南朝を創始。光明天皇の神器は偽物として正当天皇を主張。

大宰府に残された仁木義長が上洛し、一色範氏は鎮西探題となり、在地守護の大夫、

少弐、菊池、島津と対立しながら支配を強めた。九州統治、李朝との交易を推進した。

後醍醐天皇は諸国に皇子を派遣し南朝方勢力を支えた。

九州には懷良親王(八歳)を征西將軍として派遣したが、五条親元らに補佐され伊予

忽那島(松山市)に渡り、熊野水軍の支援を得て数年間滞在した。

新田義貞方として尊氏と諸所に戦つてきた菊池武重は肥後国に戻り九州南朝方を主導。

尊氏が光明天皇から征夷大將軍に補任。室町幕府は元龜四年(一五七三)まで続いた。

少弐頼尚は豊前、筑前、肥後三国の守護職を与えられ帰国した。

博多には鎮西探題一色範氏が居て、以降両者は対立し、大友、島津も一色に従わず。

歿す。享年不詳。(頼房宛の足利尊氏の御判御教書による)

後醍醐天皇が崩御。尊氏は天龍寺を建立し菩提を弔う。

大友氏泰が豊後、肥前の守護として豊後に帰国。一色の鎮西探題の権限が狭小。

宇都宮公景は大友氏泰と共に豊前国に帰国した。

『城井谷の蓬花』  
九州南北朝時代、探題方(尊氏)・佐殿方(直冬)・官方(懷良親王・菊池)三者の鼎立争い  
興国二年(一三四一)懷良親王は忽那水軍の支援を得て薩摩山川に上陸した。  
康永二年・興国三年(一三四二)

執事高師直は尊氏の恩賞給付の下文に執行力を持つ施行状を自分の名を冠して守護に

発行し、幕府への求心力を高めた。  
懷良親王は南朝方谷山隆信の支援を得て谷山城に入城し、征西府を開く。

貞和二年（一二四六）  
北朝方の薩摩国東福寺城を居城とする島津貞久氏と対立。南薩摩は南朝方に傾く。  
懷良親王は九州諸豪族へ勧誘し、肥後国阿蘇惟直、続いて菊池武光が南朝方についた。  
**鎮西探題**一色範氏の嫡男直氏が第二代鎮西探題に任命された。

奥州管領府  
室町幕府は管領府を設置。初代管領に吉良定家、畠山国氏の二氏。

貞和三年・正平二年（一二四七）

九州南朝方  
薩摩国谷山氏が島津貞久の居城東福寺城を攻撃し陥落寸前となる。

九月 南朝方  
楠木正成の嫡男正行は河内国南部を拠点に藤井寺で幕府軍の細川頼氏を破る。

十一月 南朝方  
楠木正行は摂津国南部の住吉で幕府方山名時氏を破り快進撃が続いた。

貞和四年・正平三年（一二四八）

九州南朝方  
島津貞久が谷山隆信を攻撃し勝利。懷良親王は追われ肥後国へ海路で山川津―肥後葦

北―宇土―益城郡御船城（阿蘇惟時が出迎え・居城は上益城郡山都浜の館）―菊池武光の菊池城―隈府城（菊池市）入城し征西府を開いた（大分県中津市大江医家資料館）。

一月 南朝方  
楠木正行が挙兵。「河内国四条畷の戦い」で尊氏の執事高師直に敗北し弟正時と自決。

高師直は吉野の御所を焼き払う。この成果で尊氏・師直の権勢が高まる。

六月 南北朝  
南朝方の紀伊勢力が勢いを増し、直義が尊氏に推挙し尊氏の実子とされる直冬を討伐

軍の大將として出陣させ、戦功を立てた。

豊後  
当主大友氏泰は弟氏時に家督を相続、氏時八代当主となる。

### 〈観応の擾乱・南北朝、尊氏と直義兄弟の戦い〉

貞和五年・正平四年（一二四九）―観応三年・正平七年（一二五二）

### 観応の擾乱

尊氏は軍事指揮権・恩賞充行権を京で、弟直義は所領裁判を含む政務全般を鎌倉で二頭政治体制を敷いたが、武士への戦功の恩賞給付所領による訴訟係争が幕府を裂き、日本を二分した兄弟の戦いに加え南北朝両方の対立、それを支持する武家や公家の対立が諸国に広がったが直義の死で乱は終結。守護は力を蓄え戦国時代の端緒となった。

鎌倉府設置。尊氏の弟直義と執事高師直の間で内部抗争。地方まで影響が及ぶ。

四月 南北朝  
尊氏は直義の養子直冬を長門探題として下向させ、執事高師直との対立を回避。



六月 南北朝

尊氏と高師直の権勢の高まりに直義は危機を感じ、僧の讒言（師直が恩賞給付に不満の武士に自ら越境して知行せよと行状した）により直義は師直の暗殺を企てるも未遂。

直義と師直は決定的な破局に至る。尊氏は国二分の内乱回避で執事高師直を解任。

八月 南北朝

高師直が五万の兵で尊氏・直義の館を包囲。直義の政務引退・後継に尊氏の嫡子で、鎌倉府の義詮を要求、尊氏はこれを承認した。

九月 九州南北朝

養父直義の危機で九州の直冬は上洛を目指すも播磨国赤松則村が阻止した。尊氏は備後国に留まる直冬の反幕府扇動に討伐令を出し、直冬は鞆ノ津より九州に逃れ探題の勢力が直接に及ぶ北部九州を避け、反菊池の河尻幸俊の船で肥後国河尻津（熊本市）に上陸、河尻氏に迎えられた。直冬は足利將軍家の権威で阿蘇氏、他国人の所領を安堵し支持勢力を拡大した。直冬は尊氏の上洛命令に従わず。九州は三勢力、探題方の一色（尊氏から直冬討伐令）、宮方・征西府の肥後菊池、阿蘇・懐良親王、兵衛佐殿方の足利直冬、肥後河尻（反菊池）、と御三家小貳（大宰府）、大友、島津。関東を統治していた足利義詮が上洛し直義の後継として政務を開始した。

十月 南北朝

（一三五〇）

四月 九州南北朝

大友一族詫磨宗直ら壞良親王方が城井宇都宮隆房（頼房の五男）の城に攻め入った。高師直の隆房救援の命で肥後・豊前・筑前の守護少貳頼尚は弟資尚及び筑前・豊前の守護代宇都宮一族西郷頼景に出陣を命じた。

九月 九州南北朝

直冬九州入りの当初、少貳は一色と協調し直冬と対峙したが、直冬の勢力拡大で一色の覇権先導を恐れ、足利直義の内命もあり、少貳頼尚は娘を直冬に娶らせ自陣に引入れ、直冬は一色を博多から放逐。直冬の偏諱を受け少貳頼尚の子は直資、冬資と改名。

九月 九州南北朝

豊前守護代西郷頼景は下毛郡の田口氏に如法寺に陣取る一色範氏方の宇都宮頼房の三男公景らを攻撃する為に山国方面からの攻めを命じた。

十月 『城井谷の蓬花』

六代当主高房（冬綱）は少貳氏の豊前侵攻で同調する直冬の偏諱を受けて冬綱に改名。直義が京を脱し南都に逃れ、南朝に帰順して挙兵。尊氏は少貳・直冬勢力の九州制圧を恐れ、直冬討伐令を出すも効果なく自ら五百騎で直冬討伐に出立。直義は尊氏の留

十月 南北朝

を恐れ、直冬討伐令を出すも効果なく自ら五百騎で直冬討伐に出立。直義は尊氏の留

十月 南北朝

を恐れ、直冬討伐令を出すも効果なく自ら五百騎で直冬討伐に出立。直義は尊氏の留

十月 南北朝

を恐れ、直冬討伐令を出すも効果なく自ら五百騎で直冬討伐に出立。直義は尊氏の留

十一月 南北朝

十二月九州南北朝

十二月九州南北朝

観応二年・正平六年  
(一三五一)

二月打出浜の戦い

三月 南北朝

六月 鎮西探題

六月 南北朝

南北朝

九州南朝方

八月 南北朝

八月 九州南北朝

守をつき京の足利義詮を京から追放、都を占拠し神器を接収した。尊氏は九州出兵を止め備前国から帰京に転換。中国有力国人に動員令を出すも、直冬は対抗して中国・四国国人へ動員令を出して尊氏を牽制。尊氏の先鋒高師泰は石見国で直冬方に敗れた。鎮西探題一色範氏は**宇都宮公景**に直冬に与同した元永の豊前元永村、武藤の豊前田河郡伊方庄、宇都宮の肥後岩野村、肥後木葉村の地頭職を与え味方に繋ぎとめた。尊氏の直冬討伐の九州出兵は頓挫したが、先発隊が豊前入りし、友枝・永添、高瀬、坂手隈、赤尾で秣、深水の直冬方と合戦となり、一色範氏方として野仲の庶家野依・山田、田口の各氏が参陣した。

尊氏は義詮、師直と共に摂津国で直義に敗れ、尊氏は師直の出家を条件に和睦。師直は摂津国から京への護送中に直義方から殺害された。

尊氏は直義と和議を結ぶ。条件は尊氏方武士の恩賞給付を最優先し自らは恩賞允行権を維持。直冬を鎮西探題に任命した。直冬の勢力圏は北部九州、中国西部に拡大。

直冬は年号を貞和から観応に運用変更。

足利義詮が新裁判制度「御前沙汰」を発足させた。原告は文書があれば被告の陳述なしに判決する。迅速性で受け入れられた。

尊氏は直義派に対抗し一時的に南朝に降伏し年号を「正平」とし、征夷大將軍を解任。義詮は北朝年号を復活させ京都を奪還した。南朝は光厳・光明両上皇、崇光前上皇を連れ去った。北朝は神器なしに後光厳天皇（光厳上皇の皇子、崇光前上皇の弟）を即位させ、尊氏に征夷大將軍に復帰させた。

懷良親王は五条・菊池・恵良らは筑後溝口城を攻略、筑後国府（久留米）に入る。

足利直義は義詮の補佐で政務復帰。尊氏と対立。京から鎌倉入りし反尊氏勢力を糾合。尊氏の復権により、鎮西探題の座は直冬から一色範氏となり、範氏は宗像一族小野氏と宗像城に籠城し少弐頼尚の包囲の軍勢と戦った。豊前守護は少弐頼尚（在位一三三